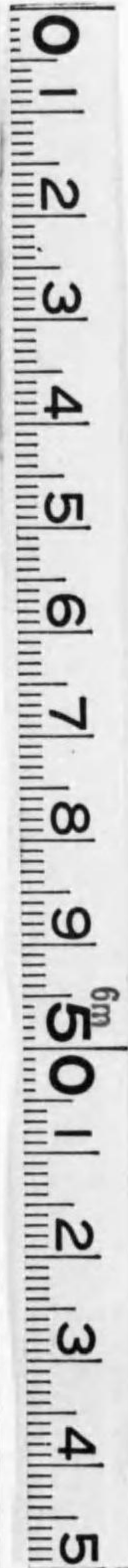


スズラン

673. 8-Mu43ウ
1200500750333

673.8
43

〇
複写



始







朱俣生



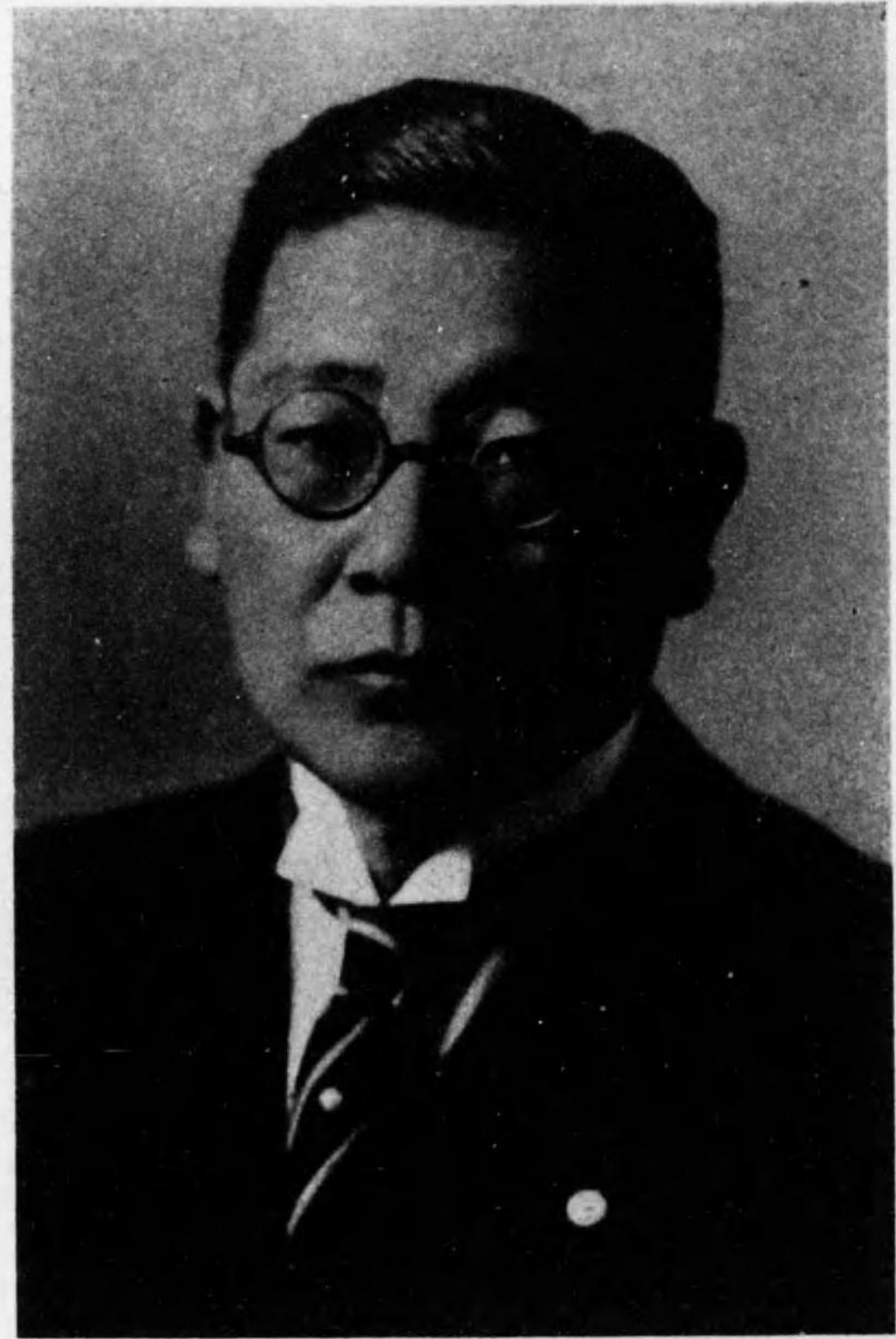
673.8
Mu43



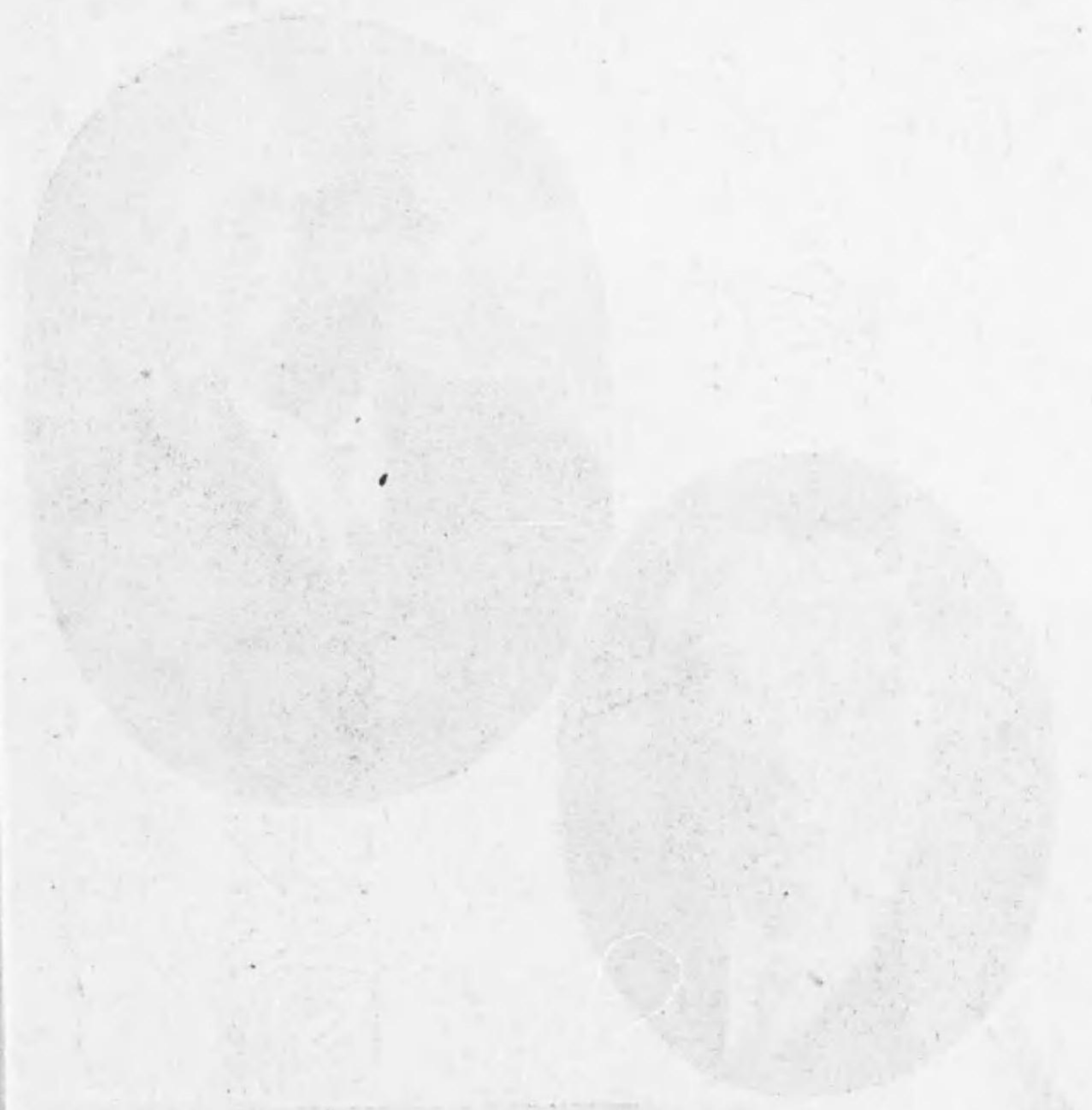
(上) 初代 十合伊兵衛氏の像
(下) 京都十合家祖 十合重助氏



★上から——十合徳太郎氏、元社
 長現監査役十合芳三郎氏、下は明
 治三十九年東上の際の記念撮影、
 前列右から十合徳太郎氏、一人置
 いて十合重助氏、後列右端岸田秀
 之助氏★



氏吉宮谷板。長會役縮取





上から
 取締役社長
 土屋啓造氏
 専務取締役
 木水榮太郎氏
 常務取締役
 小川吉久氏





氏助順谷板役縮取・上側右★

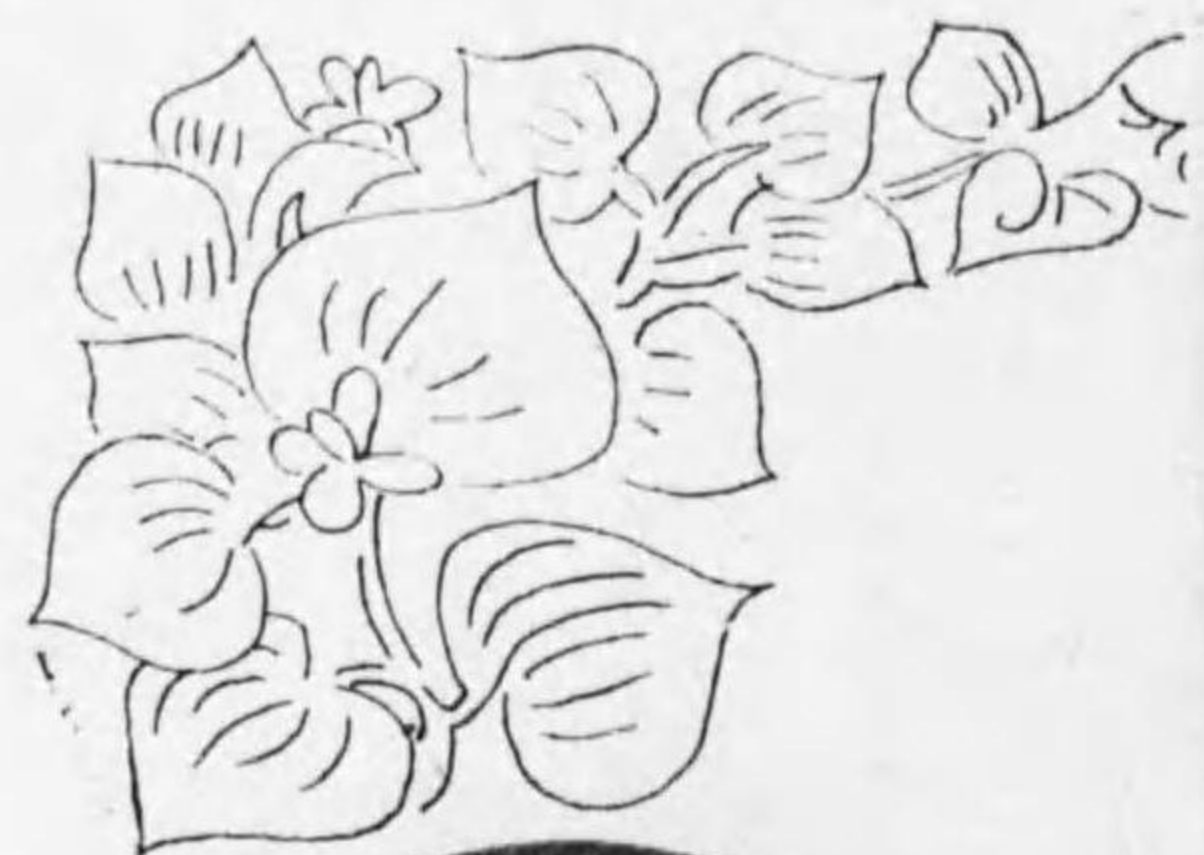
★氏郎太專谷新役縮取・下同



氏藏富本松役査監・上側左★

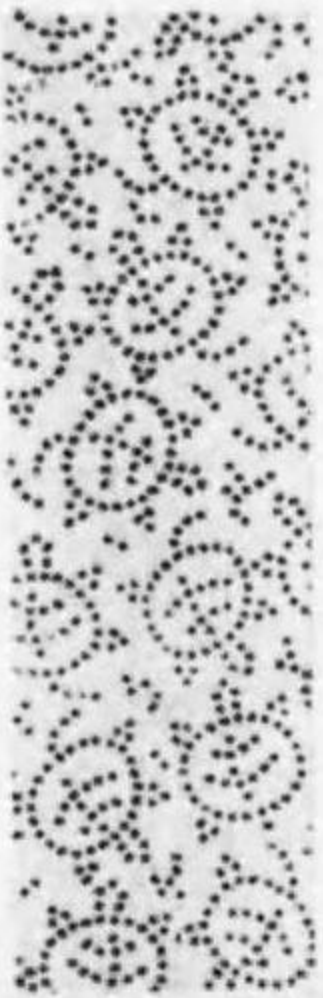
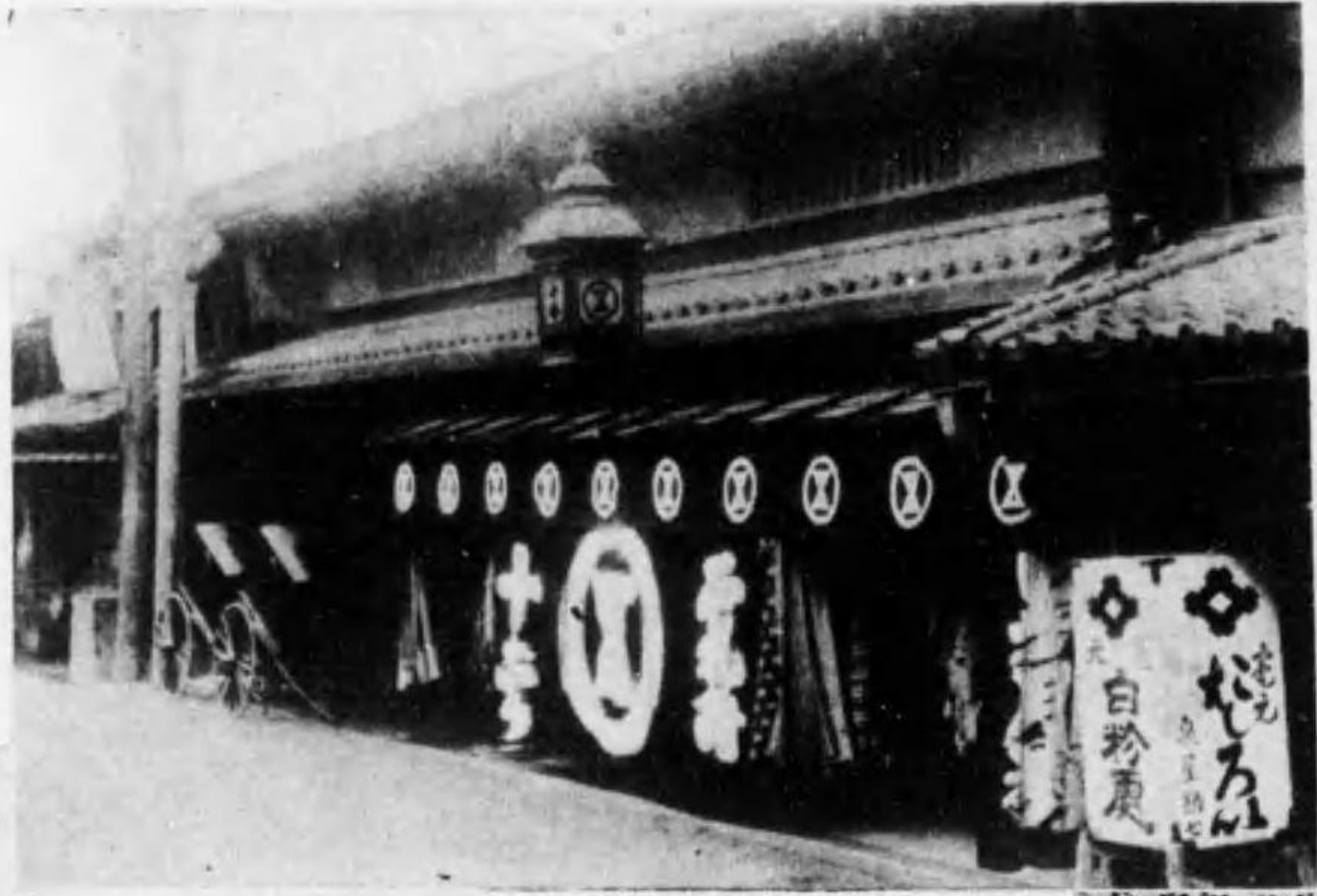
★氏郎吉仁野柴役縮取・下同



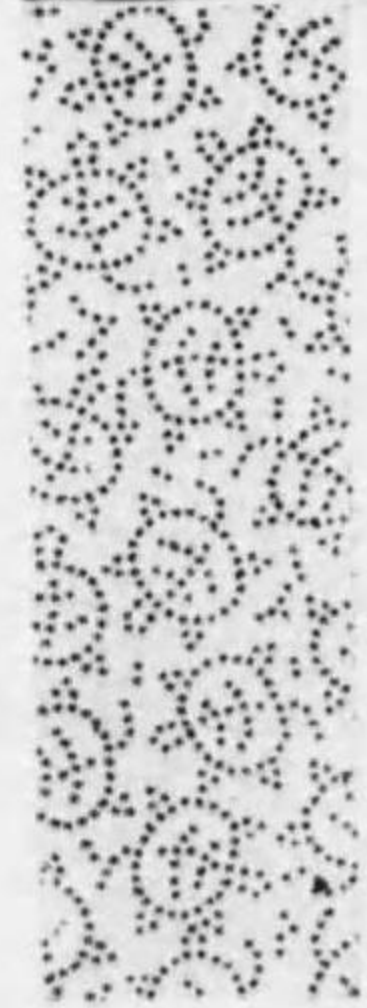
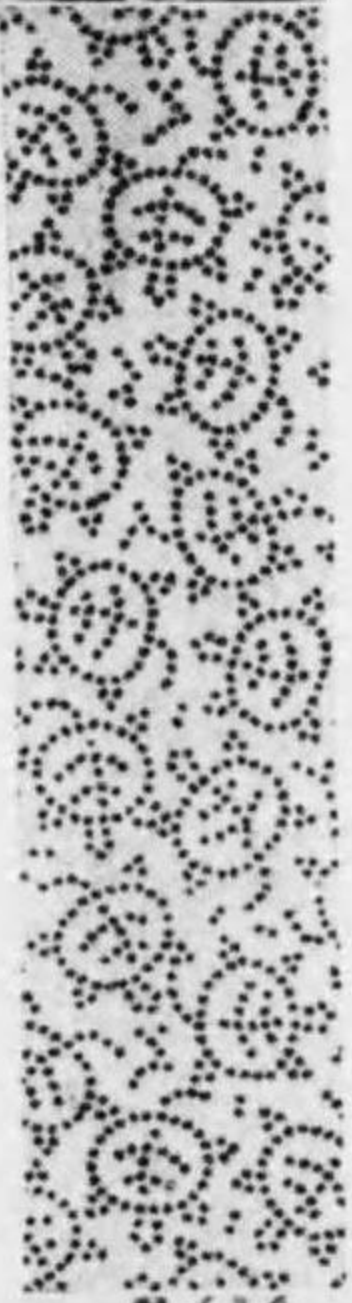


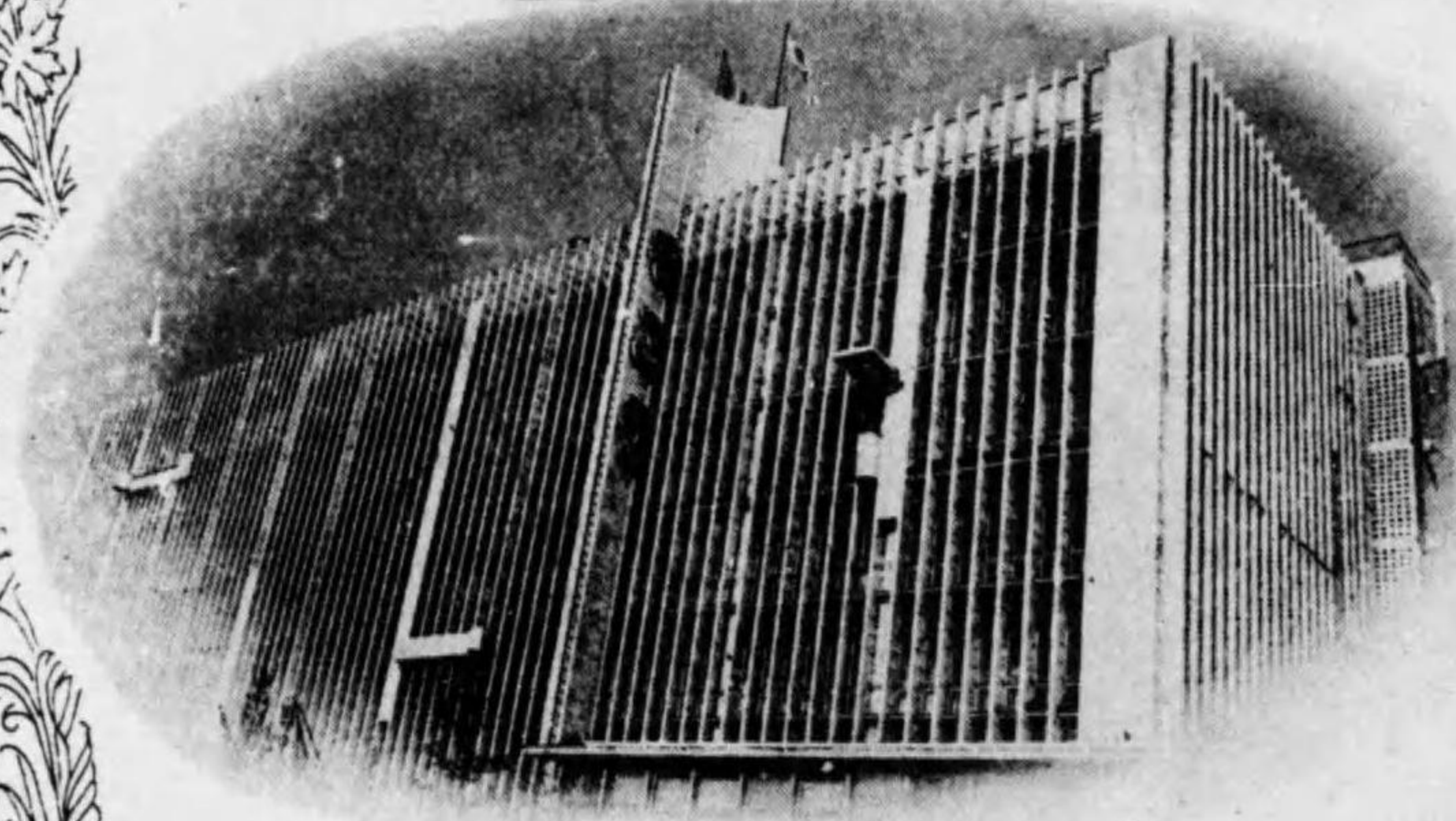
上から
取締役仕入部長
兼 商事部長
角田藤治郎氏
取締役営業部長
石田嘉男氏
取締役企画
調査部長
佐藤半氏
常任監査役
池田徳治郎氏





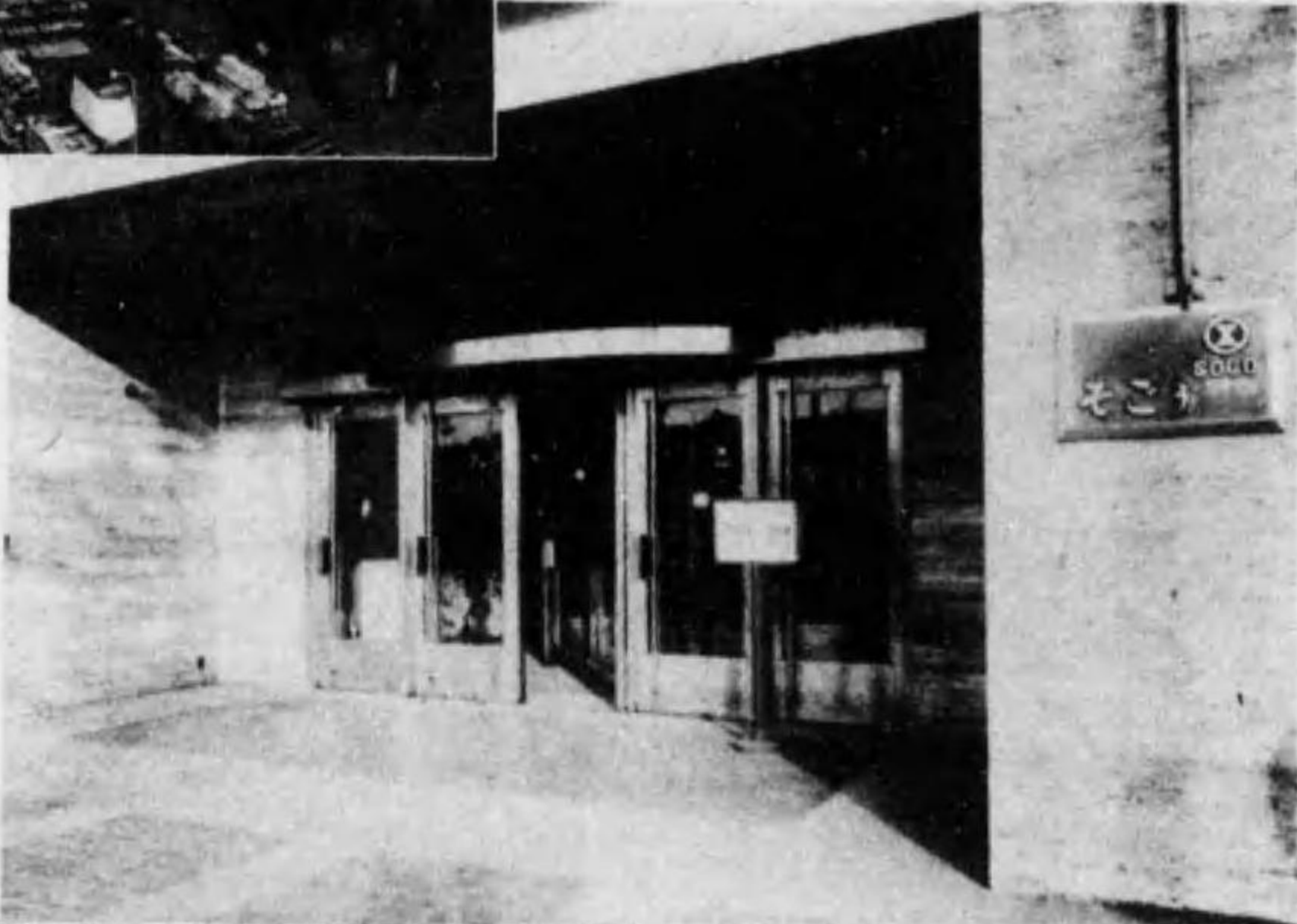
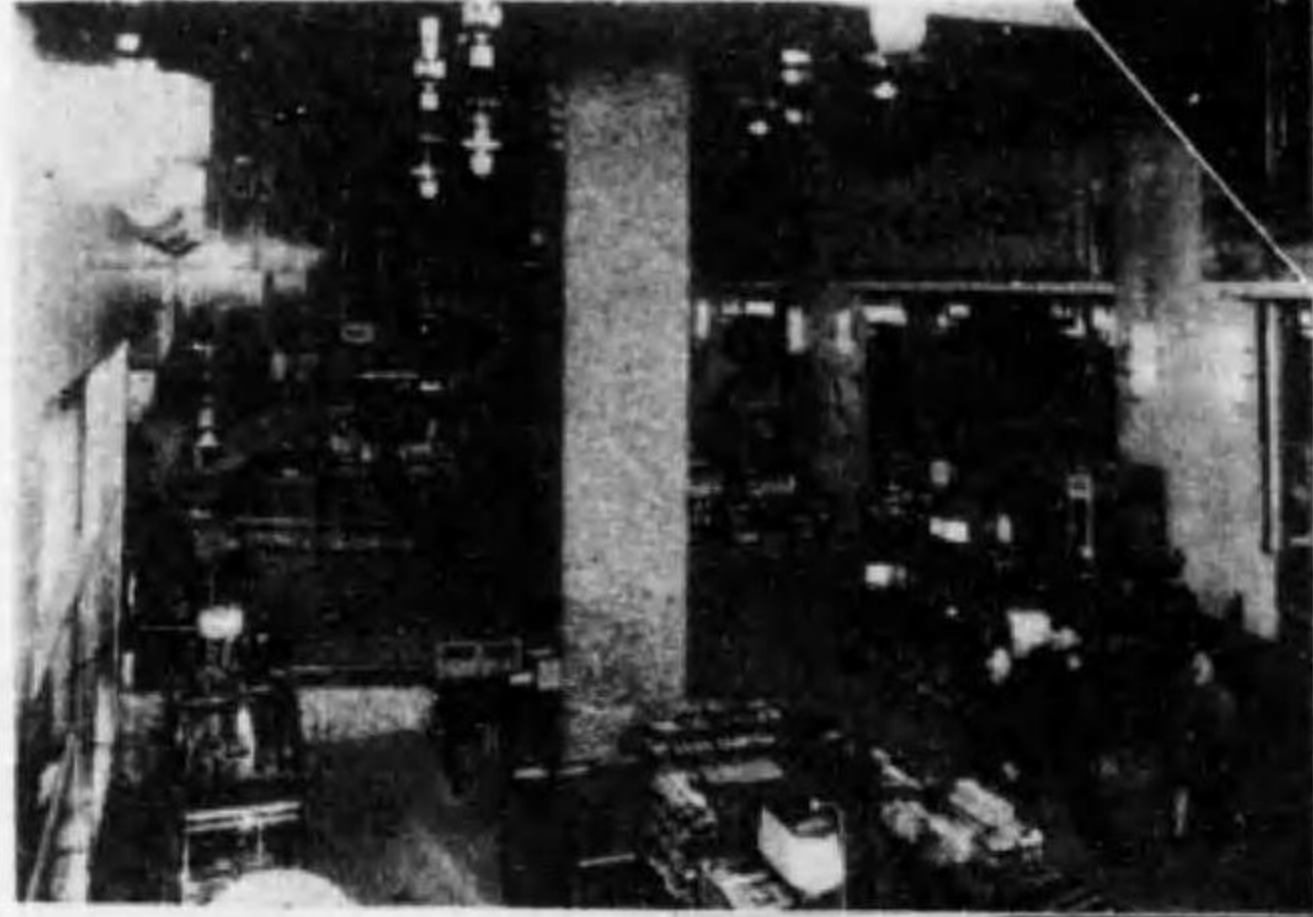
★上から——明治三十年頃の十
 合心齋橋筋店舗、明治四十一年
 四月新築開店當時の大阪心齋橋
 筋店舗、大正時代の心齋橋筋店
 舗全景★





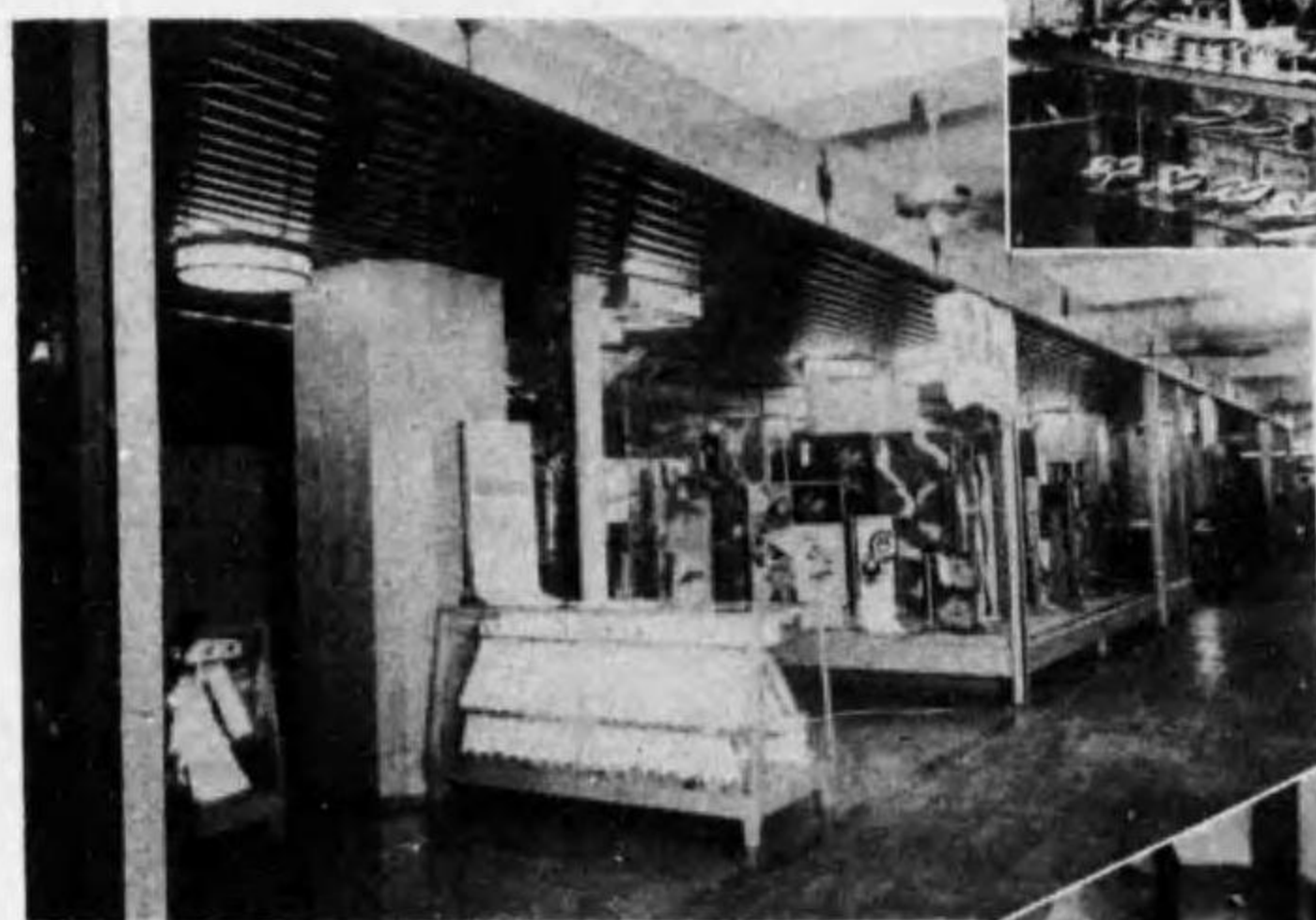
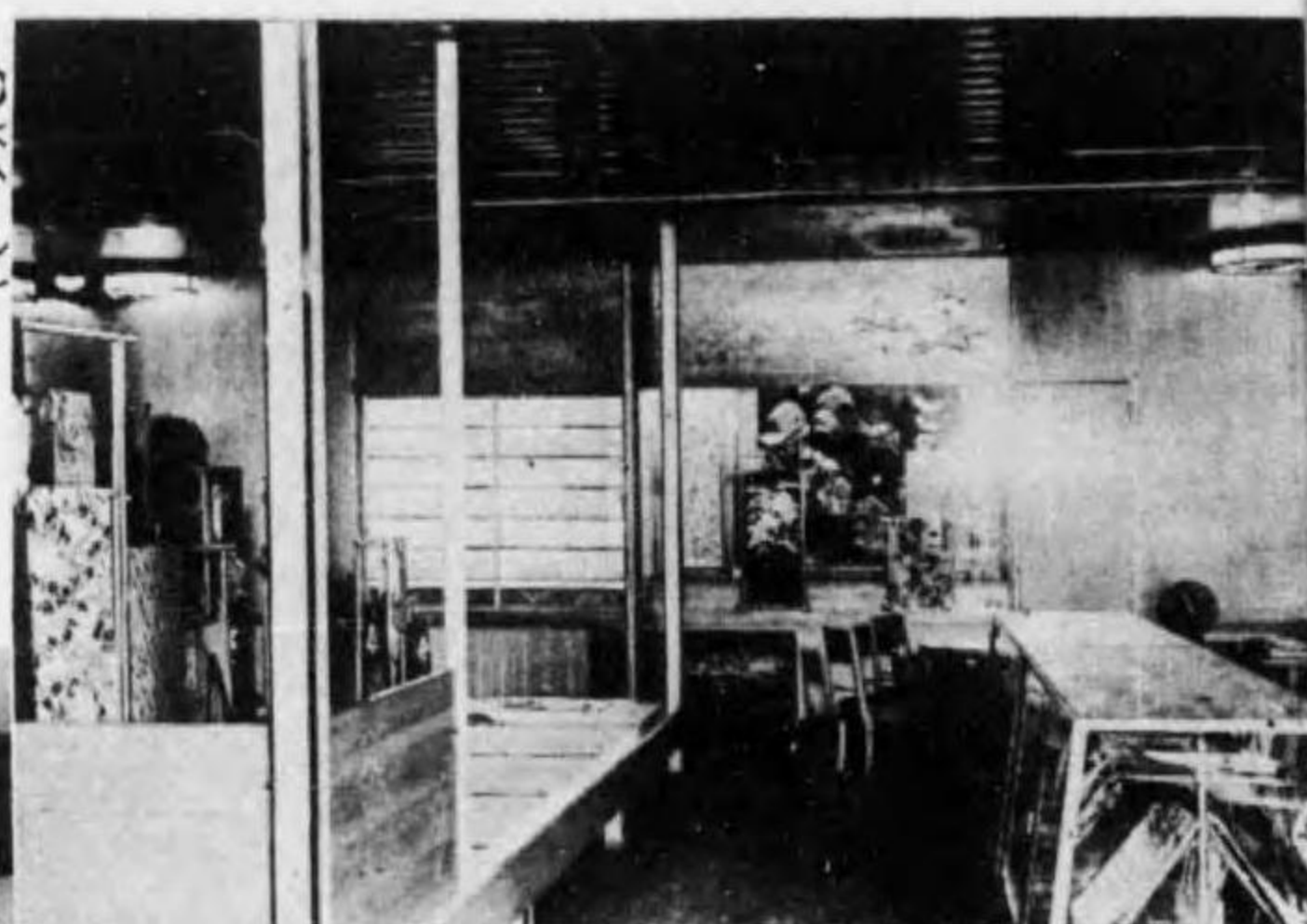
店 本 う ご そ





☆上から——本店心齋
橋玄關、同一階ホール
の一部、同御堂筋正玄
關、同地下入口、同エ
レベーターの扉★

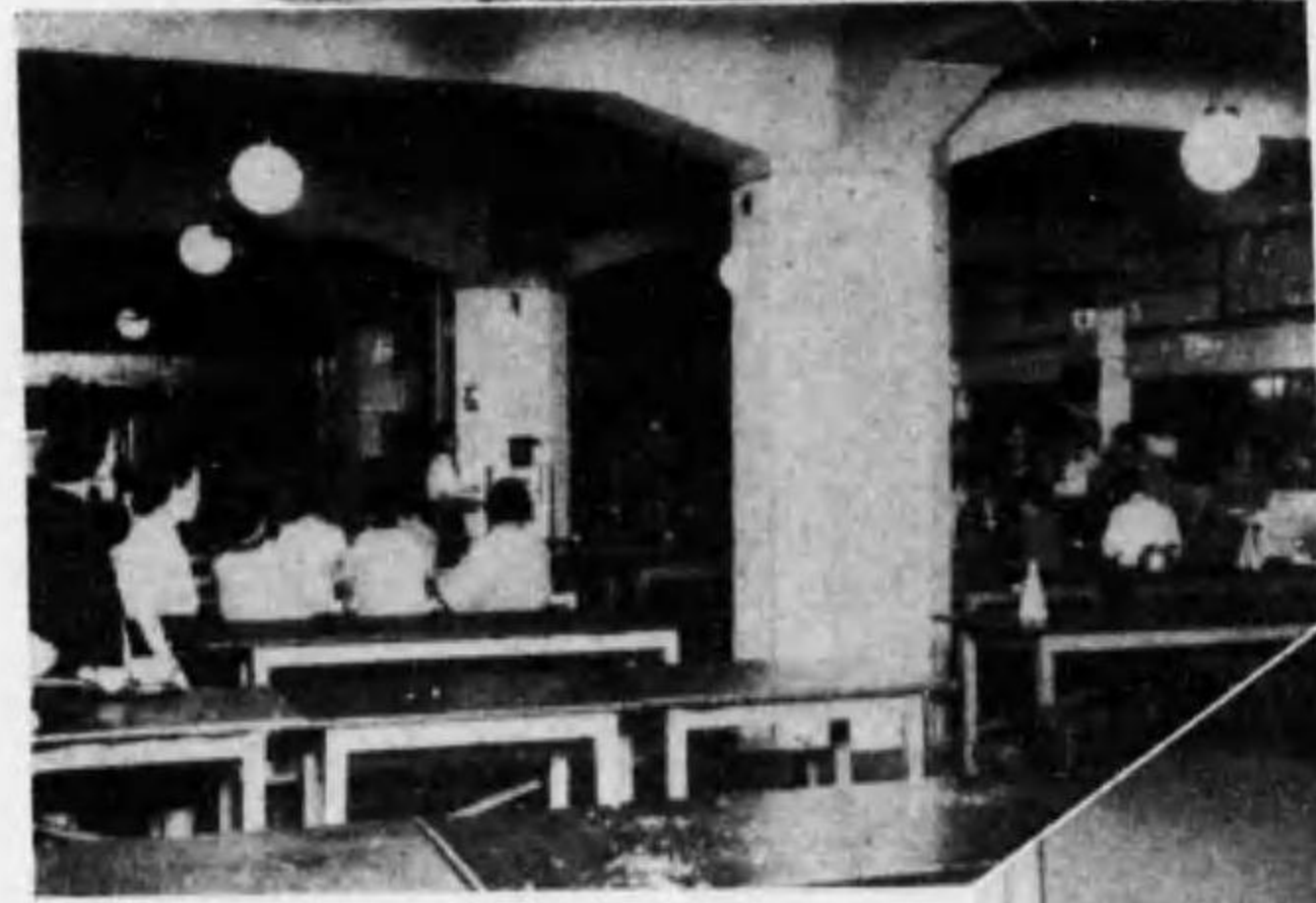
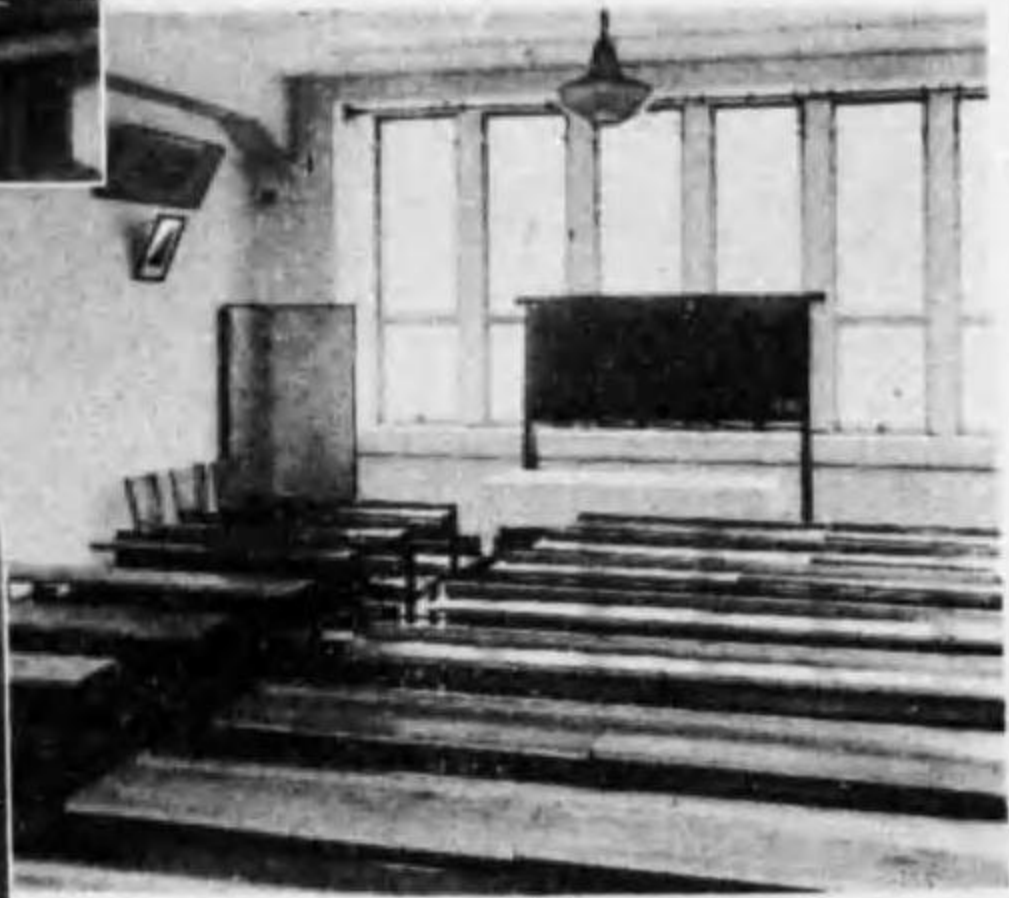




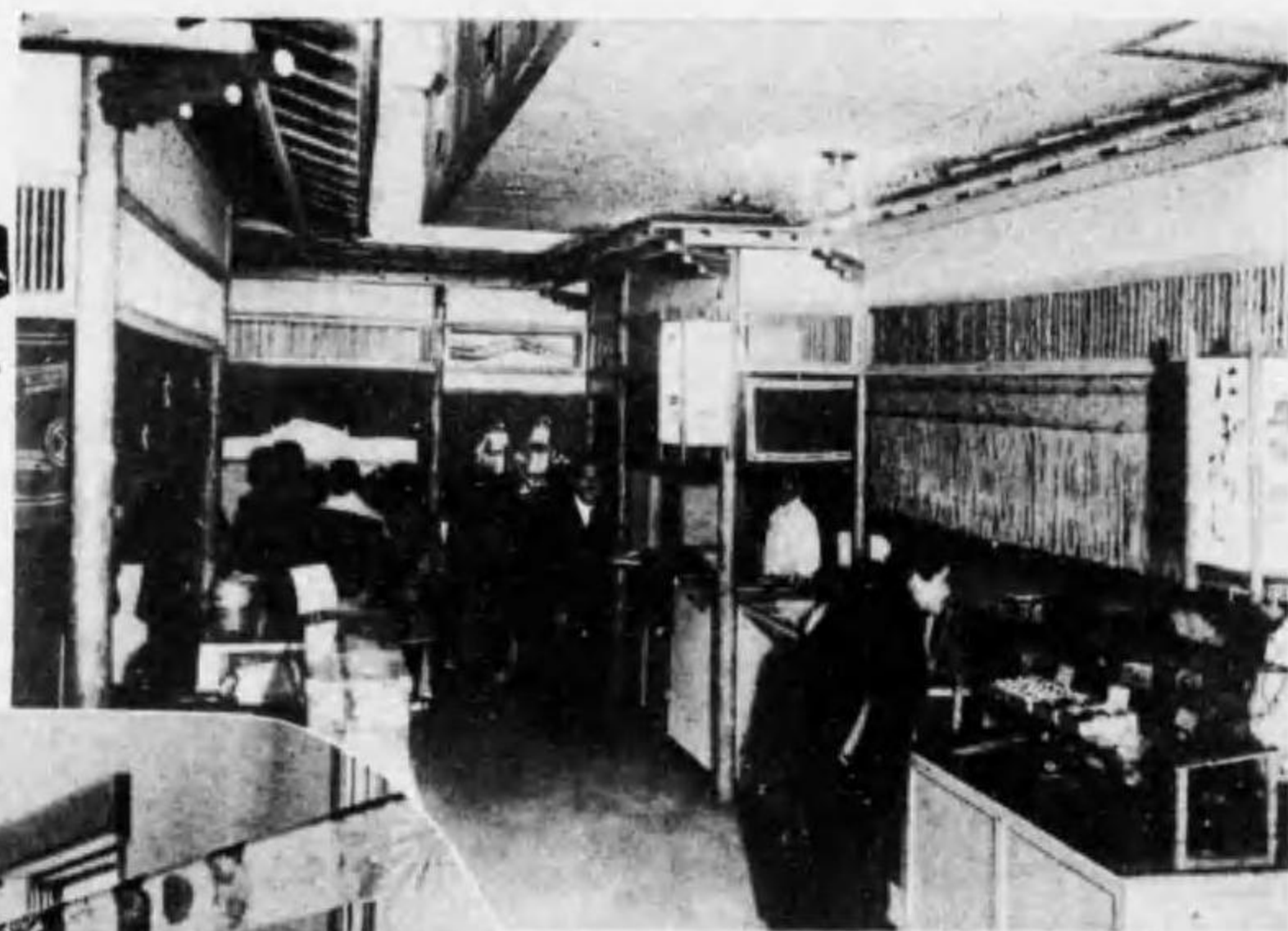
★上から—本店四階特選呉服の賣場、同六階特賣場全景、同七階東京有名専門店商品の陳列場、同四階特選呉服の賣場、同一階賣場★



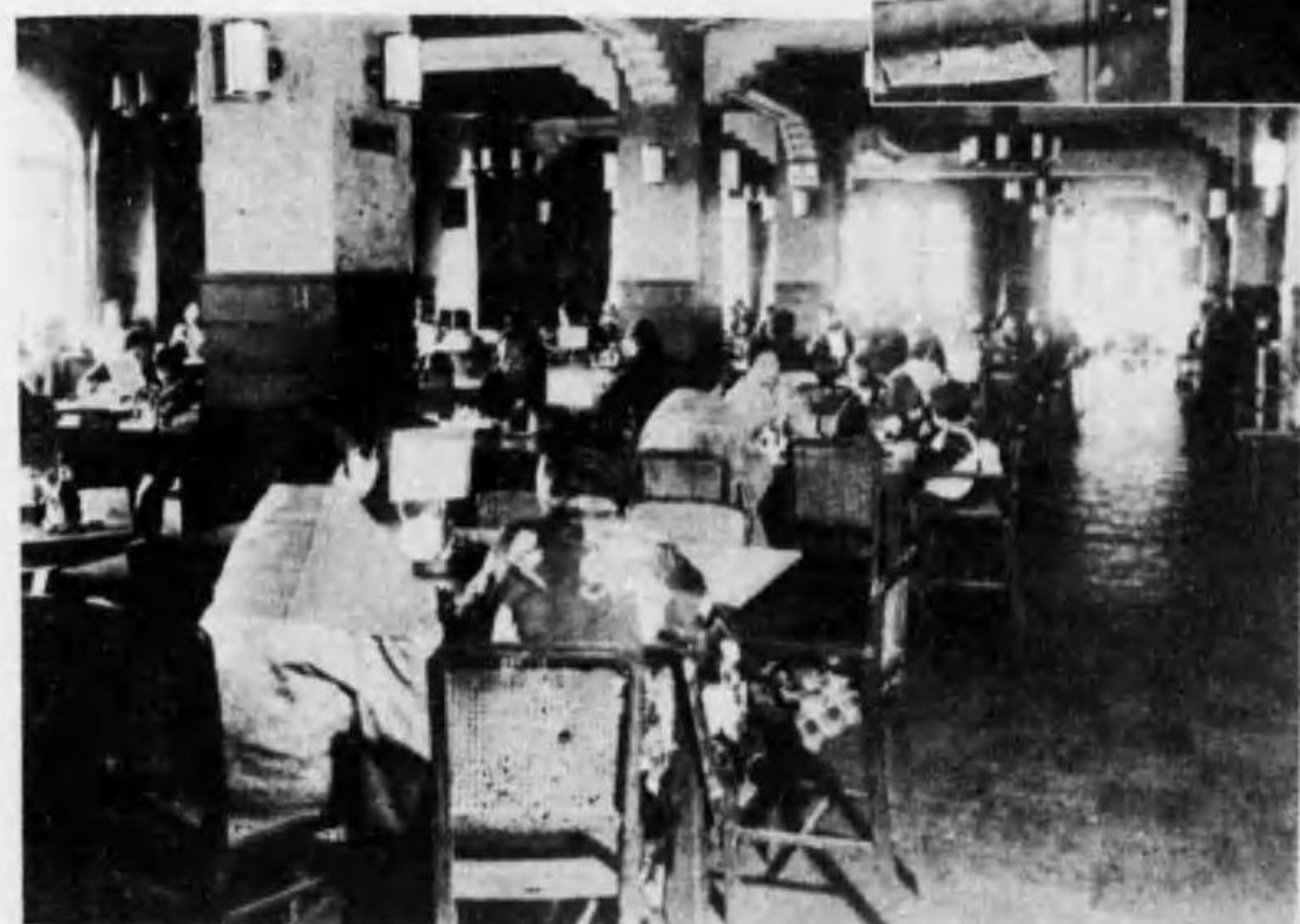
★右上から—本店二階貴
 賓室、同二階フルツ・
 パーラー、同五階貸室
 (洋室)、同五階貸室(和
 室)、左上から—本店七
 階大食堂、同八階特別食
 堂、同地下食堂★



★本店の店員施設、上から書道の稽古、六階の店員教育室、醫務室、店員食堂、茶道の稽古★

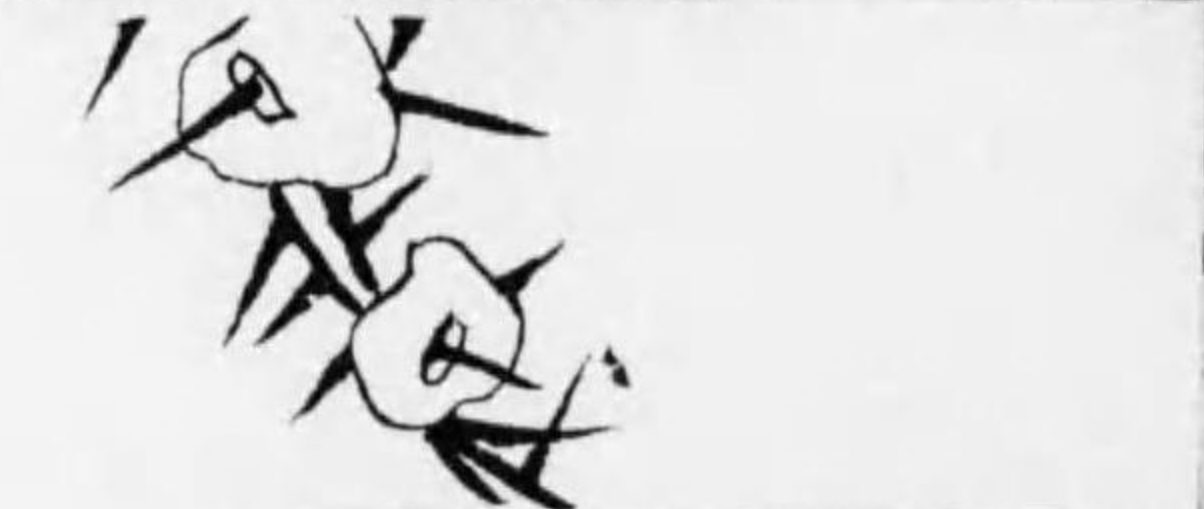


★上から—神戸店新館地
下一階食料品賣場の實演
場、同新館一階慰問袋用
品賣場、同地下一階玩具
部賣場 同七階大食堂★

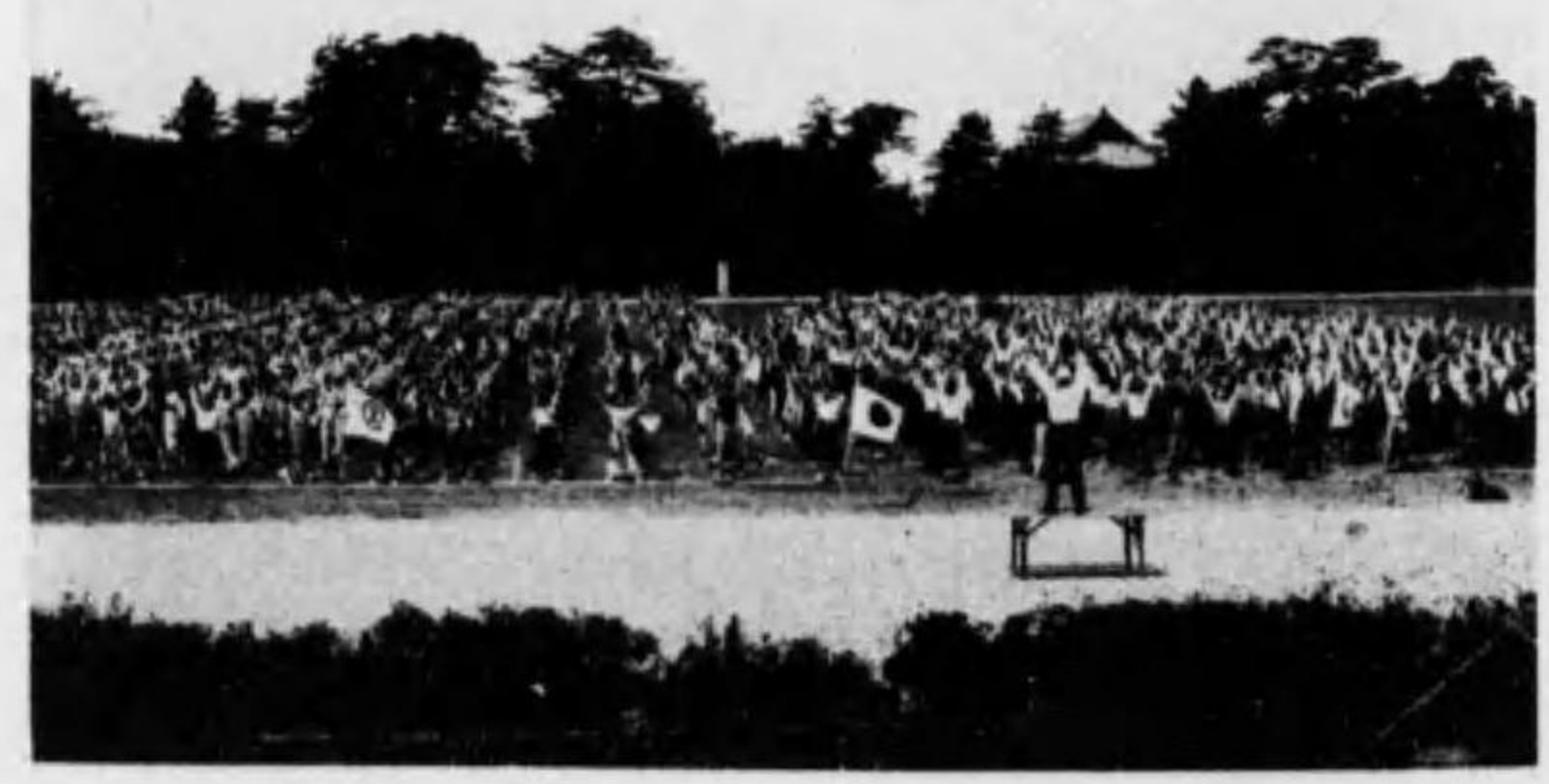




★上から神戸店
 四階呉服賣場、同
 新館一階實用品特
 賣場、六階和洋家
 具美術品賣場、圖
 内は支店長横尾忠
 愛氏★



★上から！本店の顧問品座談會神戸店厚生大會の餘興、榮光輝くのスナツプ、同じく優勝盃を授與する板谷總裁、本店厚生大會に於る會員のラジオ體操★



937
190

內容目次

沿革

創業時代……………一

第一次店舖……………一

第二次店舖……………二

吳服店時代……………三

京都店舖……………四

第三次店舖……………六

合名會社設立……………六

神戶支店……………七

第四次店舖……………七

本店仕入部設置……………八

四階建新館建築……………八

百貨店時代……………一〇

株式會社設立……………一〇

現存第一期工事……………一一

第二期工事……………一二

第三期工事(全館完成)……………一三

板谷財閥との提携……………一四

十合年譜……………一五

會社要項……………一六

株式會社十合……………一六

株式會社十合ビルヂング……………一七

株式會社十合吳服店業績一覽……………三一

經營方針並に接客上の指導精神……………三五

大阪本店

業態と經營……………四一

工事概要……………四二

店内施設……………四三

大阪本店人事職制……………四八

神戸支店

神戸支店の沿革……………五三

神戸支店の建物及び店内施設……………五九

神戸と百貨店……………四

神戸支店人事職制……………六

店員施設

店員の福利施設……………七一

保健施設……………七一

一、醫務室……………七一

二、店外醫院特約……………七一

三、職員健康保險法實施……………七一

A 組合員……………七一

B 組合組織の概要……………七一

C 保險料の概要……………七一

四、保險給附の概要……………七三

五、保健施設……………七四

六、國民體力法に依る體力検査の實施……………七五

七、體力章檢定の實施……………七五

寄宿舎設備……………七六

運動娛樂施設……………七六

一、スポーツ俱樂部……………七六

二、女子店員趣味の會……………七七

三、大運動會開催……………七七

四、夏季臨海休養所開設……………七六

教養・共濟施設……………七六

一、十合實務學校……………七六



沿 革

二、共 濟 部……………六

吾等のつとめ……………六

回 顧 (座談會)

想ひ出を語る……………六

創業時代

第一次店舗

十合の發祥は、遠く文政年間に奈良縣磯城郡耳成村十市、絹屋徳兵衛氏の次男、初代十合伊兵衛氏（釋西定）少くして、郷里より大阪に出で、他店に奉公のち、獨立して、天保初年大阪市東區座摩神社南隣（舊稱東區上難波北之町）、通稱座摩筋に、小さやかな店舗を開き、大和屋伊兵衛（略稱大伊）の名稱の下に、古着商を始めたのに由來する。

これが最初の店舗で、初代の間は、主として、絹布及び木綿のせこはんものが商はれたが、二代目伊兵衛氏の時代に到つて、營業形態は、一飛躍を遂げ、古着からさらものを扱ふ呉服商へと發展した。

この業態の伸張と變革が、第二次店舗時代を齎したのであるが、第一次店舗に就いて、少しく詳細に敍べて見ると、實はこの時代に於て、三度に亘る改新築が行はれてゐる。



その理由は、萬延元年三月七日、座摩神社産所より出火のため、店舗は類焼の厄に遭ひ、新築するところとなつたが、更に同年十二月十二日、座摩神社裏手からの出火で、再び店舗を鳥有に歸し、續けざまの災厄に、多大な損害を蒙つたが、初代伊兵衛氏の不撓不屈な負けじ魂は、遂にあらゆる障碍に剋ち克つて、再度店舗を築き上げ、明治六年、二代目十合伊兵衛氏の時代にいたるや、従來の古着商から、呉服商へと飛躍するに到つた。

斯くして、初代の素志が、理想への第一歩を踏み出すにいたつたと思ふ間もなく、明治八年二月七日、またもや、座摩神社裏手からの出火で、三度祝融子に見舞はれたが、それにもめげず、創業以來の地所を墨守して、離れなかつた。

|| 第二次 店舗 ||

ところが、二代目の次女の婿養子、十合重助氏（舊姓木水氏）は、時勢の進運とともに、心齋橋筋に進出することの有利なるを達觀し、明治九年座摩前店舗より、分家獨立して、心齋橋筋安堂寺橋角に店舗を設け、専ら木綿類、呉服類を商ひ、その業績も、商算狂はずして、漸次見るべきものがあつた。

併しながら、その經營體は素より大規模なものではなく、寧ろ、販賣商品に不足を來し勝ちの状態であつた。

茲に於て、重助氏は、本店と計つて、一段と強力なる經營體を以て、心齋橋筋に進出することの有望なることを説き、斯くして、明治十年に到り、座摩前店舗、及び心齋橋筋安堂寺橋角店舗の兩者を廢合して、新たに心齋橋筋一丁目鰻谷角に、新店舗が設けられた。

現在、ちきりや呉服店所在場所（現そごう北隣）が、それで、斯くして、第二次店舗開設を契機として、取扱商品も、高級品から、實用向きにいたる、あらゆる呉服類を整備して、名實ともに、堂々たる呉服店としての發足が成つたのである。

|| 吳服店時代 ||

即ち、二代目十合伊兵衛氏（釋教珠）を中心として、その長女の婿養子たる三代目伊兵衛氏、次女の婿養子重助氏、三女の婿養子孝藏氏等の協力合作に依り、心齋橋進出後、短年月の間に、確固たる業礎が築かれるに到り、呉服十合の名聲は、日とともに擴められて行つた。

|| 京 都 店 舗 ||

茲で、特筆すべきは、呉服十合の聲名が、商都に周ねく鳴り響くに到つたことは、素より同族の戮力協心に俟つたものではあるが、一つに同店が、京呉服に主力を注ぎ、特に友禪、お召等に於て、他の比肩を許さぬ独自の境地を拓いてゐたことが、注目されねばならぬ。

殊に、明治中期から、末期頃にかけての全盛時代には、古豪大丸呉服店の繁榮を、壓倒したもので、顧客層に於ても、船場、島の内の大家御寮人に喰ひ入り、一方には、全大阪の花柳界に、根強い勢力を張り、その流行を、左右するほどの状態を齎らした蔭には、十合重助氏の才腕が、際立つて光つてゐたことを、看過し得ないのである。

大體、重助氏は、當初、安堂寺橋角に、獨立して、店舗を築き、十合呉服店の開祖たりしとともに、鰻谷角に進出後は、専ら仕入方面を擔當し、屢次、京呉服類仕入のため、京都に赴きつゝ、あつたが、その後、業績良好となるに従ひ、出張仕入の採算上、或は、信用上不利なるを識つて、京都に店舗を開設することの有利なることを痛感し、遂に明治十八年七月、意を決して、京都に進出し、中京區錦小路通室町東入ル場所に、小店舗を構へ、更に越えて

翌十九年七月には、下京區四條通烏丸西入函谷鉾町九十三番地に、土地を買收して、店舗を新築移轉し、茲に京呉服、友禪、染物類、一般の仕入に當つた。

試みに、當時の大福帳を繰つてみると、當時、既に京都に於ては、千宗、矢代仁、丸紅等一流店との取引が行はれてゐたことが知られ、これが、京呉服において、十合が斷然名を成した基となつたもので、以て、重助氏の非凡なる人物が、窺はれるのである。

而して、京都支店は、その後、營業の擴大と共に、明治三十年十一月には、その西隣の函谷鉾町九十一番地の土地を買收して、店舗の擴張をなし、更に、明治三十八年頃より、從來の店舗を兩分し、東半分は、東店と稱して、京呉服、染物類の販賣をなした(京都店販賣部)。

また、西半分は、西店と稱して、京呉服類、染物の仕入に當つた(京都店仕入部)。重助氏は、その後も、京都に在り、仕入部、及び京都販賣部を總攬したが、その没後、京都店は、昭和二年十月、販賣部の店舗内部を改修し、百貨店形態に遷つたが、昭和十年七月これを閉鎖し、營業は、これを大阪本店に併合するに到つた。

また、京都店仕入部は、昭和十五年四月、これを閉鎖し、營業はこれ亦、大阪本店に併合し、従つて、京都支店は、昭和十五年四月を以て、廢止となり、その後も一時存置せる京都

染工部も、また昭和十六年一月十五日を以て、大阪本店内に移轉したので、茲に、京都における十合業務機關は、全部大阪へ引揚げられるに到つたものである。

|| 第三次店鋪 ||

前述の如く、京都支店の開設と相俟つて、急驟乎の發展を遂げた十合吳服店は、明治二十三年、二代目伊兵衛氏の没したるのちは、愈々、兄弟の提携鞏固となり、明治二十四年には現在の店鋪敷地の一部である心齋橋筋一丁目の土地を買収増築して、現在店鋪の基礎を作つた。

|| 合名會社設立 ||

明治三十年五月には、三代目伊兵衛、重助、孝藏三氏に依り、資本金十五萬圓の合名會社を設立すると共に、營業は、益々伸張し、伊兵衛、孝藏兩氏は、大阪に在つて、重助氏は、京都に在り、克く合作の實を擧げた。

|| 神戸支店 ||

斯くして、明治三十二年四月には、神戸市元町六丁目に出張所を開設し、待望の扇港進出を遂げるとともに、専ら吳服類の販賣に當つたが、少時にして、同年六月、神戸市相生町二丁目(神戸驛前)に神戸支店を設けた。

これが、神戸支店の嚆矢である。(別項神戸支店記事参照)

|| 第四次店鋪 ||

大阪、京都、神戸の三都に跨つて、全關西を睥睨するにいたつた十合吳服店は、更に明治四十年に到るや、營業に一新期を劃すべく、覇望に燃えて、先づ、隣地の明松商店、伊豆勘及び龜屋を買收し、表面土藏造りの本館に、中庭を隔て、その周圍に、二階建、總坪一千坪に近い建築を行ひ、四十一年四月、新店鋪の完成をみるにいたつた。

工費、六萬圓、什器設備費一萬六千圓と記録されてゐる。
而して、資本金も、當時二十萬圓に増額され、愈々陣容を鞏くするとともに、この時より

販賣商品は全部陳列式とし、また取扱商品も、従来の呉服専門の羈絆を脱して、雑貨、及び美術品の一部を加へ、早くも、百貨店様式への第一歩を踏出した。

而して、新築完成とともに、「落成記念春衣賣出し」を催し、一般に大評判を博したのも、この時である。

|| 本店仕入部設置 ||

超えて、明治四十四年に到るや、南區大寶寺町西之町十七番地に、宅地百七十坪を買収して、大阪本店仕入部を設置し、初代仕入部長に、三代目伊兵衛氏の長女の婿養子である十合芳三郎氏が就任した。

また、同時に、販賣部長には、十合重助氏の世嗣徳太郎氏が就任した。

|| 四階建新館建築 ||

その後、資本と建物は、年を逐うて、擴大強化せられ、大正六年には、出資金額五十萬圓に増資され、同時に、従来の土藏造り店舗は、販賣商品の累増とともに、狹隘となつたため、

又もや、隣接地(大寶寺町西之町所在土地)を買収の上、新店舗を改増築することとなり、同年五月二十日、地鎮祭を舉行(工事請負者竹中工務店)、大正七年十一月、鐵筋コンクリート造、四階建の新館が竣成した。

この建物、敷地面積百八十坪、建築延面積八百十七坪で、舊館を合すると、千八百坪程の建物となり、心齋橋筋に面した部分は、従来の土藏造り、舊館内部を改造して使用した。

百貨店時代

株式會社設立

大正八年十二月、十合芳三郎、十合徳太郎兩氏を、代表取締役として、資本金十萬圓、全額拂込の株式會社、十合吳服店を設立するとともに、從來の合名會社十合吳服店を、これに吸収し、翌九年三月、資本金三百萬圓、全額拂込とし、愈々百貨店經營への、第一歩を踏出すこととなつた。

斯くして、合名會社より、株式會社への組織變更を契機として、百貨店經營へ邁進することとなつた十合吳服店は、大正十年、本店店頭を改修するとともに、土藏造り建物一階を、土間として、子供百貨部を新設した。

當時、大阪における百貨店は、三越も、大丸も、子供用品部と稱するものが設けられてをらず、随つて、その嚆矢と稱せられる。

次いで、大正十二年には、三代伊兵衛氏の長男で、當時心齋橋筋一丁目に、十合洋服店を經營してゐた十合秀太郎氏の營業を買收して、洋服部を新設する等、漸次、百貨店の形態を整へていつたが、一方、高島屋は、長堀店を大正十一年に、松坂屋は、大正十二年に日本橋店を、夫れづ開店するに到り、斯くして、十合また、大正十四年六月、その店舗を五階建に増築(工事請負者大林組)し、新姿容を整へて相見えるにいたつた。

斯くして、業勢の暢達と共に、時代の進運に則すべき、本格的百貨店經營が策されるにいたり、着々その準備工作を進めたものである。

そして、當時之れが、頗る有望企業として、財閥の間でも注目されるに到り、昭和のはじめには、一時野村合名との提携が傳へられたが、これは噂だけで、實現に到らなかつた。

そのうち、昭和六年、現専務たる木水榮太郎氏(十合重助氏五男、父君の生家世嗣となる)は、長兄徳太郎氏が、代表取締役の任を退くと共に、その後を襲ふや、電光石火、劃期的新經營への火蓋を切り、同年、現在店舗の第一期工事に着手した。

現存第一期工事

即ち、昭和六年十月二十二日を以て、起工式を舉行（建築設計者村野藤吾、建築請負大倉土木株式會社）昭和八年八月を以て、第一期工事を竣工、舊館五階建建物より移轉し、新装麗容の賣場が、大阪市民の視野に展開するところとなつたが、同第一期建物は、心齋橋筋に入口無きため、營業上種々なる不便を感じたので、これに依り、北方隣接地を更に買収し、茲に第二期工事竣工に到るまでの間、心齋橋筋臨時入口を設けることとなり、昭和九年六月一日、バラック建築を完了、賣場の一部に使用した。

なほ、これに先だち、昭和九年一月十日、舊館取毀作業に着手すると共に、第二期工事への準備に入つた。

|| 第二期工事 ||

新館第二期工事は、舊館取毀に引續き着工し、昭和十年九月二十四日を以て竣工、茲に、建物敷地面積千六百一十坪餘、建築延面積九千六百五坪餘、總階數十一階の高樓に、全館大理石と硝子の近代的麗装を施した上、更に外觀骨格は、恰も、ドイツのカールスタットを想起するが如き様式を用ひ、本邦では、殆んど、その類を見ないところの、縦の線を頗多に採

り入れて、建築の優美感を、一層惹き立たしめると共に、特異なスタイルを有つた建物として、一般の矚目の的となつた。

斯くして、昭和十年十月一日を以て、新館開扉式を舉行し、商都に偉容を誇る大百貨店として出現すると共に、全館新築落成記念賣出しを、大々的に舉行して、更生のスタートに氣勢を副へた。

|| 第三期工事（全館完成） ||

上述の如く、全館新築落成記念賣出しは、第二期工事の竣工を俟つて行はれたが、事實上の現存全館完成は、第三期工事の竣工に依つて、ピリオドを打つものである。

即ち、第三期工事は、第二期工事の竣工に引續き、北側にあつた在來のバラック建物を取毀して着手、昭和十二年十一月を以て竣工（工事請負者島藤、設計者村野藤吾）、茲に、第一期、第二期、第三期工事を合計して、床面積三六、八〇九平方米、賣場面積二八、五二〇平方米を以て、全館の完成を告げたものである。

|| 板谷財閥との提携 ||

新館建築と併行して、貴族院議員たり、我國有数の財閥として知られる板谷宮吉氏一黨が新生十合のため、乗り出すこととなつた。

而して、昭和十年七月二十日、臨時株主總會を開催した結果、前役員全員退任し、新たに板谷氏を取締役會長として、専務取締役に、板谷系土屋啓造氏、常務取締役に木水榮太郎、岸田秀之助兩氏以下、新役員選任せられ、茲に、新陣容成り、資本金も百萬圓を増額して、四百萬圓とした。

而して、從來の代表取締役木水榮太郎氏は、常務取締役として、本店に在り、實際上の經營の衝に當ることとなつたのである。
斯くて、創業百有餘年、一介の古着商より起つた十合は、今や、名實共に、本邦に於ける大百貨店陣に、その班を連れ、日進月歩、發展の一路を辿りつゝあるのである。

十 合 年 譜

天 保 初 年 初代十合伊兵衛大阪座摩神社南隣ニ大和屋伊兵衛(略稱大伊)ノ商號ニテ古着商ヲ開業ス

萬 延 元 年 三 月 七 日 座摩神社産所ヨリ出火ノ爲メ店舗類焼ス

同 年 十 二 月 十 二 日 座摩神社裏ヨリ出火ノ爲メ店舗再度類焼ス

明 治 六 年 九 月 二代十合伊兵衛從來ノ古着商ヲ廢業シ吳服商ヲ開始ス

明 治 八 年 二 月 七 日 夜十一時頃座摩神社裏ヨリ出火店舗三度類焼ノ厄ニ遭フ

明 治 九 年 四 月 心齋橋筋安堂寺橋角ニ十合重助出張店ヲ設ク

明 治 十 年 心齋橋筋一丁目鰻谷角ニ南店ヲ設ク

明 治 十 八 年 七 月 二 十 五 日 京都市錦小路通室町東入所ニ十合重助京都仕入店ヲ開ク

明 治 十 九 年 七 月 十 二 日 京都市四條通烏丸西入函谷鉾町九十三番地土地建物ヲ買收

京都支店ヲ新築ス

明治二十四年 心齋橋筋一丁目店舗土地建物買收ス

營業資本金四萬五千圓也

明治二十九年 營業資本金十萬圓也
資本主左ノ三名

三代 十合伊兵衛 (大阪)

十合重助 (京都)

十合キク (大阪)

明治三十年 營業資本金十二萬圓也

明治三十年五月二十六日 十合合名會社設立登記ヲナス

出資金十五萬圓也

合名會社々員左ノ三名ナリ

三代 十合伊兵衛 (大阪)

十合重助 (京都)

十合孝藏 (大阪)

明治三十年六月十五日 十合合名會社京都支店登記ヲナス

(京都市下京區四條通烏丸西入函谷鉾町九十三番地)

明治三十年十一月十九日 京都市四條通烏丸西入函谷鉾町九十一番地土地百八十九坪

餘買收ス、京都支店擴張

明治三十二年六月二十五日 十合合名會社神戸支店登記ヲナス(神戸市相生町二丁目)

明治三十四年五月十三日 神戸市元町五丁目八十九番地ノ貳及ビ同町七十三番地ノ貳

買收ス

明治三十五年五月 神戸市元町五丁目ニ神戸支店ヲ設立、相生町二丁目店舗ヨ

リ移轉ス

支店長 前田新藏

明治四十年十月 大阪本店新築工事中ニ一部假開業

明治三十年九月 合名會社十合吳服店出資金二十萬圓

明治四十一年四月 大阪本店新築落成ス

明治四十三年一月 大阪本店販賣部長十合孝藏病氣ノタメ十合芳三郎新ニ販賣

部長トナル

十合徳太郎大阪本店參與トシテ京都支店ヨリ大阪本店ニ勤務ス

明治四十四年十月二十七日

合名會社十合吳服店(出資金二十萬圓)

社員出資金左ノ如ク變更ス

八萬五千圓 十合 重助 (京都)

六萬五千圓 十合 芳三郎 (大阪)

五萬圓 十合 孝藏 (大阪)

明治四十四年四月二十一日

大阪市南區大寶寺町西之町十七番地宅地百六十五坪餘買收

茲ニ大阪本店仕入部ヲ設置ス

明治 四十四年

十合芳三郎ハ大阪本店仕入部長トナリ、十合徳太郎ハ大阪本店販賣部長トナル

大正元年十二月二日

大阪市東區餌差町百九十三番地土地二百七十四坪餘買收、

大阪本店寄宿舎ヲ設ク

大正六年三月一日

合名會社十合吳服店出資金額ヲ五十萬圓ニ變更ス

大正六年五月二十日

大阪本店改増築ノタメ地鎮祭舉行

工事請負者 竹中工務店

大正八年十二月三十日

株式會社十合吳服店資本金十萬圓全額拂込済ヲ以テ設立

役員左ノ如シ

代表取締役 十合 芳三郎 (大阪本店仕入部長)

代表取締役 十合 徳太郎 (大阪本店販賣部長)

取締役 岸田 秀之助 (京都支店仕入部長)

取締役 前田 新藏 (神戸支店長)

監査役 十合 秀太郎 (大阪十合洋服店主)

監査役 十合 菊次郎 (京都)

大正八年六月

木水榮太郎大阪本店販賣部長ノ事務ヲ取扱フ

大正九年一月

十合菊次郎死亡ニ因リ監査役退任

大正九年三月二十五日

株式會社十合吳服店(資本金十萬圓)ハ合名會社十合吳服店

ヲ二百九十萬圓ニ評價シテ之ヲ吸收合併シ、資本金三百萬圓全額拂込済トナル

大正十年八月

大阪本店々頭改修、子供百貨部ヲ新設ス

大正十二年

大阪本店ニ洋服部新設ス

心齋橋筋一丁目十合洋服店(十合秀太郎經營)ノ營業ヲ買收ス

大正十二年三月二十五日

役員改選左ノ如シ

代表取締役 十合芳三郎

代表取締役 十合徳太郎

取締役 木水榮太郎

取締役 岸田秀之助

取締役 前田新藏

大正十四年三月二十九日

監査役 十合秀太郎 退任

同年四月九日

監査役 十合政次郎 就任

同 森田榮五郎 就任

大正十四年六月

大阪本店五階建増築工事竣工

工事請負者 大林組

大正十五年四月十六日

役員(取締役)改選

代表取締役 十合徳太郎

取締役 木水榮太郎

同 十合芳三郎

同 岸田秀之助

同 前田新藏

十合芳三郎ハ代表取締役退任ス

大正十五年四月

大阪本店夜間營業ヲ開始ス

從來決算期毎年一月末日ノ處本年度ヨリ毎年二月末ニ變更ス

昭和二年三月一日

株式會社十合ビルディング資本金拾萬圓全額拂込済設立

役員左ノ如シ

代表取締役 木水榮太郎
取締役 十合留藏
同 前田新藏
監査役 多田虎千代

昭和六年五月一日

十合徳太郎代表取締役並ニ取締役退任

同日

木水榮太郎、岸田秀之助、夫々代表取締役ニ就任ス

昭和六年五月十日

監査役十合政次郎退任

同日

森田榮五郎監査役重任

同日

十合重三郎監査役ニ就任

昭和六年十月二十二日

大阪本店新築第一期工事起工式舉行

同日

建築設計者 村野 藤吾

同日

工事請負者 大倉土木株式會社

昭和七年十月

十合通信販賣特約チェーンヲ創設

昭和七年四月二十七日

監査役森田榮五郎退任

同日

間狩貫一監査役ニ就任

同日

十合重三郎監査役ニ重任

昭和八年十月一日

阪神電鐵三宮終點ビルヂング地上八階地下二階建延坪三千餘坪ヲ借屋シ、神戸支店ヲ元町五丁目ヨリ移シテ開店ス

同日

同時ニ元町五丁目店舗ハ閉鎖ス

昭和八年七月

大阪本店新築第一期工事竣工（延坪三千坪、地上八階地下三階、鐵筋コンクリート造）舊館ヨリ移轉ス

昭和九年一月十日

大阪本店舊館取毀、新築第二期工事着手

同年六月一日

心齋橋筋泉勘化粧品店跡ニ假建築ヲナシ、心齋橋筋臨時入口トシテ賣場ニ使用ス

昭和十年七月二十日

臨時株主總會ヲ開催、前役員全員退任、新ニ左ノ役員選任サル

代表取締役 板谷宮吉
 取締役會長 土屋啓造
 専務取締役 木水榮太郎
 常務取締役 岸田秀之助
 同 岸田秀之助
 取締役 板谷順助
 監査役 松本富藏
 同 柴野仁吉郎
 同 前田新藏
 支配人 小川吉久
 相談役 十合芳三郎
 (前役員)
 代表取締役 木水榮太郎
 同 岸田秀之助
 取締役 十合芳三郎
 同 前田新藏

監査役 十合重三郎
 同 間狩貫一

昭和十年八月十四日

小川吉久支配人登記

昭和十年九月二十七日

株式會社十合ビルヂング役員全員退任

新タニ左記役員選任サル

社長(代表取締役) 板谷宮吉

取締役 木水榮太郎

取締役 板谷順助

同 松本富藏

同 柴野仁吉郎

同 土屋啓造

同 監査役 岸田秀之助
同 支配人 小川吉久

昭和十年九月二十七日

株式會社十合ビルヂングハ資本金ヲ六十五萬圓増加シテ、
 新ニ資本金七十五萬圓全額拂込済トナル

昭和十年十月一日

大阪本店新築第二期工事竣工、全館開業ス

昭和十一年二月二十九日

株式會社十合吳服店ハ資本金壹百萬圓ヲ増加シテ、新ニ資本金四百萬圓拂込額三百二十五萬圓トナル

昭和十一年九月十四日

心齋橋筋一丁目四十二番地泉勘化粧品店跡ニ大阪本店第三期増築工事起工式舉行

設計者 村野 藤吾

工事請負者 株式會社島藤

昭和十二年三月八日

大阪本店八階事務所ヲ撤廢シ賣場トス

昭和十二年三月十七日

監查役前田新藏退任

十合芳三郎監查役就任

昭和十二年十二月一日

大阪本店第三期増築工事竣工、全館開店

昭和十二年九月二十六日

南區鰻谷西之町三番地ニ十合別館建築工事起工式舉行ス

設計者 村野 藤吾

工事請負者 株式會社島藤

昭和十三年五月二日

常務取締役岸田秀之助死亡ニ因ル退任登記ヲナス

昭和十三年八月五日

小川吉久、角田藤治郎、池田德治郎新ニ取締役ニ選任

昭和十四年一月二十八日

十合別館竣工、本館事務所門ノ一部移轉ス

昭和十四年四月二日

夕刻大阪本店六階ヨリ出火

六階特別食堂、七階大食堂、六、七階賣場ノ一部ヲ燒失ス

翌四月三日休業半日ニシテ午後一時ヨリ六、七階ヲ除イテ

開店ス

昭和十四年六月二十八日

中華民國北京內四區南玉帶胡同六號ニ本店商事部出張所ヲ

設置ス

昭和十四年七月十九日

中華民國漢口江漢路二百八十號ニ本店商事部出張所ヲ設ク

昭和十五年四月十八日

商號ヲ株式會社十合ト改稱ス

昭和十五年四月十八日

京都支店ヲ廢止ス

昭和十五年十月二十三日

神戸支店新館(地上一階、地下二階)竣工開店ス

會社要項

株式會社十合

設立 大正八年十二月三十日

所在地 大阪市南區心齋橋筋一丁目三十八番地
 神戸支店 神戸市葺合區小野柄通八丁目二十三番地 (阪神三宮ビルディング内)

資本金 四百萬圓

内拂込額 三百二十五萬圓

株數 舊株(五拾圓拂込) 六萬株
 新株(十二圓五十錢拂込) 二萬株

役員 取締役會長(代表取締役) 板谷宮吉

大株主 (一、〇〇〇株以上)

專務取締役	土屋啓造
常務取締役	木水榮太郎
取締役	板谷順助
同	小川吉久
同	角田藤治郎
同	池田德治郎
監査役	松本富藏
同	柴野仁吉郎
同	十合芳三郎
二〇、〇〇〇株	板谷生命保險株式會社
一七、七八〇株	板谷宮吉
六、〇六二株	十合正一
三、四〇〇株	前田新藏

一、六四四株
一、五八三株
一、四〇二株
一、三九九株
一、二三七株

十合チヨ
株式會社十合ビルヂング
十合重三郎
十合留藏
木水榮太郎

(昭和十五年二月二十九日現在)

株式會社十合ビルヂング

設立 昭和二年三月一日
所在地 大阪市南區心齋橋筋一丁目三十八番地
資本金 七十五萬圓 全額拂込済
株數 五拾圓拂込 壹萬五千株
役員

取締役社長 板谷宮吉
取締役 木水榮太郎
同 板谷順助
同 松本富藏
同 柴野仁吉郎
監査役 土屋啓造

株式會社十合吳服店業績一覽

(年一回決算)

	拂込資本金	利益金	配當金	配當率
大正十年 (大正九年度)	三、〇〇〇千圓	二一八千圓	〇千圓	無配
大正十一年 (大正十年度)	三、〇〇〇	三〇八	二四〇	八分
大正十二年 (大正十一年度)	三、〇〇〇	二五九	二二〇	七分
大正十三年 (大正十二年度)	三、〇〇〇	二五九	二二〇	七分
大正十四年 (大正十三年度)	三、〇〇〇	一八五	一八〇	六分
大正十五年 (大正十四年度)	三、〇〇〇	一九〇	一八〇	六分
昭和二年 (大正十五年度)	三、〇〇〇	二四〇	二二〇	七分
昭和三年 (昭和二年度)	三、〇〇〇	二三二	二二〇	七分
昭和四年 (昭和三年度)	三、〇〇〇	三〇三	二二〇	七分
昭和五年 (昭和四年度)	三、〇〇〇	二七七	一八〇	六分

昭和六年 (昭和五年度)	三、〇〇〇	二二六	一五〇	五分
昭和七年 (昭和六年度)	三、〇〇〇	一七〇	一二〇	四分
昭和八年 (昭和七年度)	三、〇〇〇	一七九	一二〇	四分
昭和九年 (昭和八年度)	三、〇〇〇	一九一	一二〇	四分
昭和十年 (昭和九年度)	三、〇〇〇	二〇〇	一二〇	四分
昭和十一年 (昭和十年度)	三、〇〇〇	二四五	一二〇	四分
昭和十二年 (昭和十一年度)	三、二五〇	二六三	一三〇	四分
昭和十三年 (昭和十二年度)	三、二五〇	二四六	一六二	五分
昭和十四年 (昭和十三年度)	三、二五〇	三〇〇	一九五	六分
昭和十五年 (昭和十四年度)	三、二五〇	五一七	二二七	七分

以上

經營方針並に 接客上の指導精神

十合百貨店 往時の合名會社時代は、外商にその主力を置かれ、以て吳服十合の盛名を謳はれただけに、その顧客層としては、上層階級を狙つたものであるが、株式會社となり、百貨店形態に移るや、その經營法は、大丸百貨店がその對象となつたことは否定出來まい。

大衆層を目標とし、中流どころを中心として、高級向き、實用向きを兩翼に、當時としては經營法の常道を進んだ。

そして、その經營方針を語らんが爲には、先づその接客方針を語らねばならない。

元來、百貨店、それは自由主義經濟の花形とも云はれ、また、資本主義の權化とまで云はれた程、華やかな企業ではあつたが、打寄せる時代の浪は、何時までも百貨店を時代の寵兒として 置いて呉れさうも無い。

百貨店が、その搖籃の時代から、今日の輝かしい成長を續けてゐた間は、社會經濟もまた、自由思想にその根底をおいて、成長しつゝあつた。

斯くて、自由主義經濟は、この自由主義思想より出發した契約自由、並に、私有財産制度の二大原則の地盤の上に、搖ぎなき地歩を固め、一方伸び行く資本主義の影の形に添ふ如く、百貨店もまた、多幸なるその生涯を送つて來た。

だが、時代は逆轉した。

世界市場の狹隘化と、世界恐慌によつて、その根底を搖られた資本主義經濟は、所謂、有つ國と、有たざる國との相剋を激化せしめ、國家の自存と、經濟的自立との意識を、いやが上にも高からしめ、加ふるに、大東亞戰爭の勃發と、獨英を中心とする歐洲大動亂の熱風は、好むと、好まざるとに拘らず、世界のそれと同じく、日本に於ても、「個人に先だつ全體」の理念を、絶體の地位にまで引上げて了つた。

そしてこの事は、かつては、法律思想の上に於ては、絶對の原則であつた筈の「契約の自由」と、「所有權絶對」の二大原則に對して、爆彈的衝擊を與へ、且つまた、個人の打算と、自利追求の弊に對しては、單に局部的解決をのみ與へてゐたに過ぎなかつた「資本主義への

制限立法」たる「公序良俗」「信義誠實」の一般條項が、所謂時代の脚光を浴びながら、戰時經濟立法の全般に亘つて、帝王條項として、君臨するに至つた。

謂はば、一切の企業理念が、今斯うした公益優先理念に出發した諸立法の下に、その自由を拘束せられ、許容せられたる範圍内に於てのみ、その自由性を持つに過ぎざる事となり、而も、それに即應した全面的急轉回を、要求せられつゝあるのだ。

果して、然らば、一企業としての百貨店も、獨りこの歴史的轉換の埒外に在り得べき筈も無く、また、この目まぐるしき、變轉を拱手して送迎してゐるだけでは、事足りるものではない。

一切の企業は、それが、何時如何なる社會にあつても、また、それが如何なる形式の下にあつても、それは、「社會と共に榮え、社會と共に亡ぶ」ものであると云ふ事を、誰れも、忘却はしないだらう。

斯くして、新體制運動が進展し、社會の全領域に亘つて、高度國防國家建設の爲に、一切の人と、物と、資金が、公益優先、職域奉公、臣道實踐の理念の内に、運用せられる時、社會の一企業としての百貨店も、當然過去の自由主義的、自利追求の企業目的より脱却して、

國家と共に榮え、社會と運命を共にするが如き、企業理念へ向つて、全機構の動員を、敢行せねばならぬ。

斯くて、従來は、單に販賣の爲にのみ、運用せられたる百貨店の組織も、今は、戰時國民生活をして、遺憾なからしむる爲の、「配給」へ動員さるべきであり、全國民の悉くをして、高度國防國家建設に、協力せしむる爲に、その生活の糧を送る配給機關として、運用せらるべき重大責務を負荷されたとも云へよう。

こゝに於てか、従來の接客法も、また、店員の接客態度も、單に、販賣する爲のそれ等から進んで、販賣する事自體が、眞に、職域奉公たるの實體を備へたものへ、轉化せらるべきである。

別言すれば、販賣商品の總てが、戰時生活を満たすに足るべき效用を有するものであり、接客態度自體が、また、この國民生活に役立つ效用の主張に積極的であらねばならない。

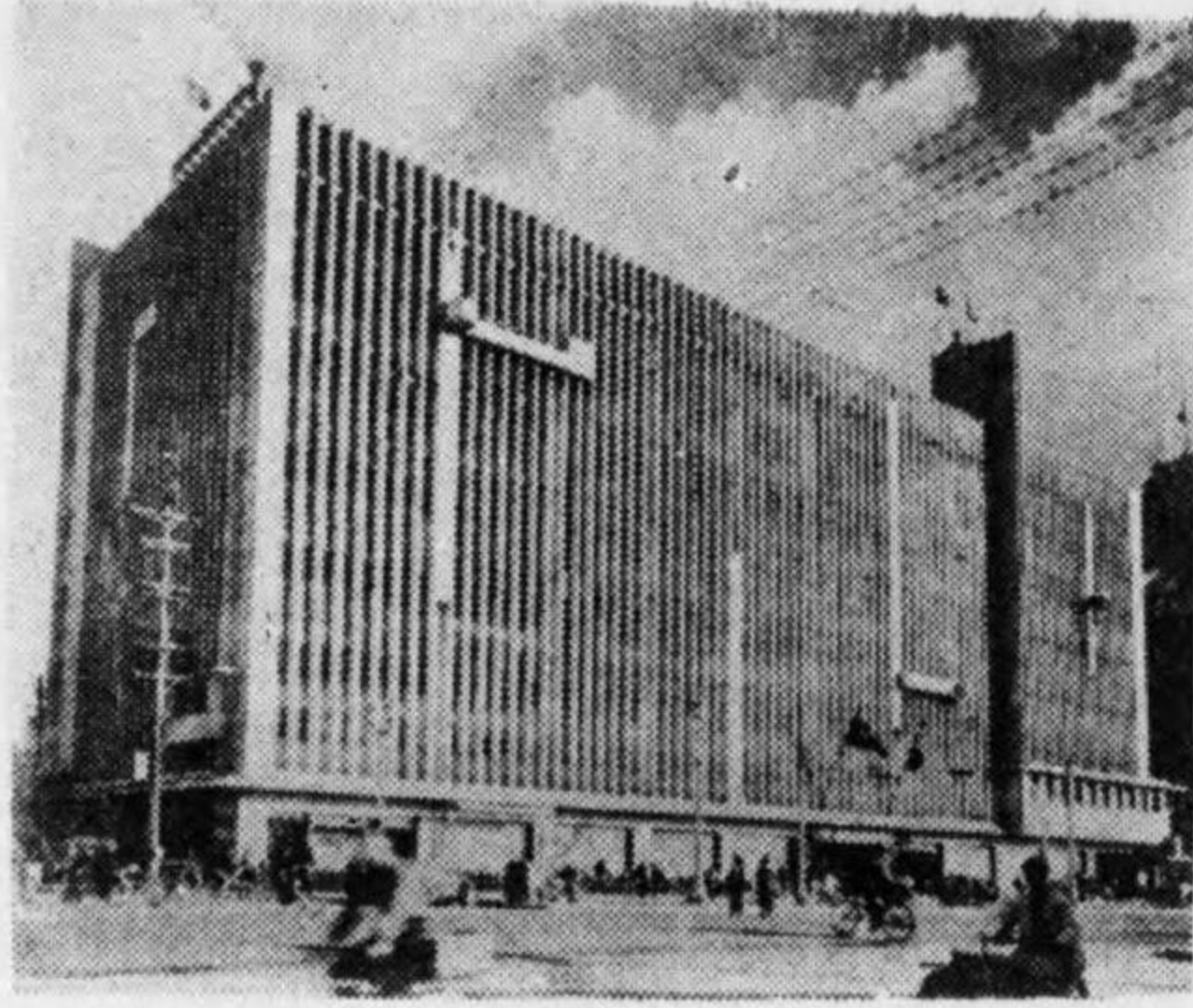
その事は、古くから、當店に於て、店員の三信條として、その第一條に掲げて來た、「お客様に對しては、——親切丁寧、朗らかに」と云ふ信條の精神と、何等異なる點を見ない。即ち、この信條の精神は、單なる叩頭主義に非ずして、須からく、接客するに當つては、

誠意を中心とした内容と、商人としての柔みを負びた物腰を、形式として備へ、併せて、健康の象徴たる明朗さを持つた、接客態度であらねばならぬと思ふのである。

更に謂はば、總ての來客に對しては、親、兄弟、親類、友人、知己に對するが如く、一切をお客本位に判斷し、尙進んでは、自己を客の立場に置き、客に對しては、戰時生活上、必要とする商品の效用、提供に缺くる所なからしめ、物と共に、とかく凝固の傾向にある人心に、明朗感を送ることが、今日、吾々配給業者としての百貨店に果せられた責務であり、接客法の指導精神も、こゝに、その重點を持ち、こゝより出發するを至當とすると主張するものである。

斯くしてこそ、店員としての一切の行動が、すべて、職域奉公を實踐することとなり、職場々々を通じて、大政に翼賛するの榮譽を擔ひ得るとも謂へるのである。

これが、當店店員に對する接客上の指導精神である。



大阪本店

大阪本店

業態と経営

そごう本店は、別項の如く、大阪市に於ける大丸に次いで古い歴史を持つ呉服店で、往時から鰻谷角に店を開いてをり、明治中期から、末期頃にかけての全盛時代には、隣接の大丸呉服店の繁榮を壓倒したもので、外商部（當時外廻り）の活躍は、絶對的のものであつたと謂はれてゐる。

従つて、その顧客層の如きも、所謂、船場島の内の大家御寮人を把握し、一方、全大阪の花柳界に、根強い勢力を張り、その流行を、左右する實力を持つて、當時から夙に、「呉服は十合」の盛名を馳せてゐた。

大正中期以後、一時は、内部の經濟的事情などに禍ひされて、往時の殷盛ぶりを、喪ふに至つたこともあつたが、神戸店の開店、本店新館落成、外部資本の投下等によつて、俄然、生氣を取戻し、これに應ずる木水店長の、縦横の才腕による経営法よろしきを得て、一時乖

離した顧客層を、完全に恢復、爾來、順調に、今日の隆昌ぶりを示してゐるが、經營上に關しては、全店の商品を、努めて上層的とし、四階に常設特賣場を設けて、マークダウン、或は、値頃品の特賣奉仕をする外、六階には、業界の注目を集めた東京京都専門店の出張街を作り、或は六階には、三都の代表的食料品店を出張せしめ、一般に普及宣傳を行ふなど、零細緻密な計畫の下に、これを行なふは勿論、屋上をさうパーク、七階演藝場、六階催し會場等、店の信條たる「お遊びに、お買物に」を、縦横に徹底せしめて居ることで、これが、大阪人士の趣味に、合致したものである。

殊に、自動車入口などは、我國でも、最初の設備で、御堂筋の完成は、その完備と共に活用が注目されてゐる。

工事概要

昭和六年十月起工、同十年九月三十日竣工したが、引續き増築工事に着手、十二年十二月一日に竣工をみて、こゝに、軒高三十一米（塔屋上端まで四十米）、深さ（地下三階まで）十四米一九、同じく（基礎下端まで）十五米一四、建物總高五十九米三四、間口（御堂筋側）

七十二米、奥行六十三米八十の近興建築型に據る堂々たる勇姿を、誇示することとなつた。

構造 鐵骨、鐵筋混凝土造、地上八階、地下總三階。現在、地下三階建築の例はあるが、同店の如く、總三階の地下室を配置したものは、この建築を以て、嚆矢とされ、従つて、その施工法には、非常に困難が伴つて、普通、河中橋脚の工事に應用する、所謂、潜函法を建築に應用して、多大の苦心を拂つた後、この工法を成功せしめた。

外装 外装材料の主材は、伊太利産トラバーチン（大理石の一種）であるが、壁面は、巾六寸、奥行一尺八寸の伊太利トラバーチン板を、無數に並列、外廻り、一階迄の間は、全部獨逸産トラバーチンを使用し、その他は、總てクリムム色特製タイルが用ひられてゐる。

窓と窓の間は、硝石煉瓦張りとなつて居るので、トラバーチンの垂直線間は、恰も、窓の連續の如くに見える。

かくて、昇降機、エスカレーター、非常設備、冷煖房装置、各階階段等の附帯設備にも萬全を期し、異色ある店舗を形成したが、ここに、店内施設の一二を拾つてみよう。

店内施設

百貨店建築に、全く新しい様式を整へたものだけに、各階毎に、頗る特徴を持つた、多様の施設がある。

今、その特徴を、二三摘記すれば、左の通りである。

演藝場 七階、南西隅にある面積百三十五坪、七百人の座席を有し、八階からはバルコニー式に座席が出て居る。

床は、リノリューム張りで、傾斜面を爲し、西側窓は、日光を斜断する爲めに、木製シヤッターを使用してある。

常設ステージ、及び客席の照明は、主として間接法を以てし、舞臺照明、音響等にも、研究がつくされ、防音装置は、勿論、壁と天井にも、苦心がはらはれてゐる。

ステージのバックには、ホリゾントを使用、舞臺及び樂屋は、約五十五坪を占めてゐる。天井の高さ十八尺、巾五四尺、奥行八〇尺、三ヶ所の非常口が設けられてある。

貴賓室 二階、鰻谷に面した處にある。約三十坪餘りの贅美を盡したものである。内部羽目板は杉の一枚板。その他は、ウォールナツツ、天井は、桐ベニヤ張りに、銀揉み紙があしらひとなり、春慶塗とした「合打ち」となつて居る。

また、入口周り、及び壁の一部は、檜ベニヤを主體とした春慶塗。扉内側は、杉の立木を春慶塗の高蒔繪としたもので、帝展作家、奥村霞城氏の力作。床はコルク敷に、薄緑、下地に紫色のフェルトを敷きつめた豪華振りで、入口の傍らには、大理石張り噴水を中心に、同じ帝展作家、大國治郎氏作の鑄鐵レリーフ、及び飾り柱がある。

裏側は、數奇屋風のバルコニーがあるなど、絢麗豪華なものである。

貸室 五階に設備され、和風、洋風の二様式になつてゐる。

洋室は十四坪。床は籐敷き、天井はベニヤ竹を配し、壁は日本砂壁仕上げとし、多分に日本趣味を加味して、落着きを見せてゐる。

和室は、十疊の座敷と、四疊半の茶室に、小庭園を配し、是等を合して約二十五坪。千家風の茶室好み、竹林に燈籠二基を点在させ、庭徑に小溪を造つて、雅趣を見せてをり、これらの貸室は、一般會合の借受けに應ずる。

美粧室 三階、鰻谷側にあり、總面積三十五坪、美粧結髪の外、浴室の設けがあるのを特色とする。マニキュア室、休憩室等、器具調度も、一切完備してゐる。

食堂 六階に、特別食堂。七階に、一般大食堂。地階に、お好み食堂。二階にフルーツ。

バーラーがある。

特別食堂は、此店の自慢の一つ。客席七十坪、別室十坪、休憩室及び御案内所で十六坪、厨房四十坪、合計三十六坪。

天井は一小間毎に、インディレクトで、溫和な照明を用ひ、賣場との境界には、獨逸のスキムックガラスを使用、西側は、強い西日を避ける爲に、特に考案された硝子ブロックを積んでゐる。

壁畫は、藤田嗣治畫伯の「春」と題する高さ十尺、巾十五尺の大畫である。

バーラーは、心齋橋口の上部、吹抜きに面した二階、賣場とは、没交渉な相對したる處にある。間口二十尺、奥行八十尺、座席は六十席、壁面には、二十尺四方の大引寫眞二面があり、照明も能く、經營は、千疋屋、和洋酒、カクテル、フルーツ、料理などある高級バーラーである。

七階一般食堂は、間口八五尺、奥行六〇尺、四一〇坪で、客席は四〇〇椅、和洋支、及び嗜好喫茶が供されてゐる。

地階は、お好み食堂で、各料理が、大部分均一となつてゐるのが、特色であらう。

其他 御堂筋、心齋橋筋、大寶寺側の三ヶ所に、出入口を設けて、特に、大寶寺側には、自動車出入口が設けられて居る。各出入口扉は、ホワイトブロンズ製を以て、磨き上げられ内部床は、テラゾーとし、周圍壁は、總てオークベニヤ張り、各獨立柱、及びエレベーター前は、イタリー産大理石を使用してゐる。

入口に聳立する五本の獨立柱は、黒御影、他の壁面は、ドイツ産トラバーチンを以て張られてゐる。ショーウィンドー周圍には、イタリー産高級大理石を使用、前の金物は、ホワイトブロンズである。

玄關天井は、イタリー大理石を使用し、天井には、春陽會員、鶴丸梅吉氏加工の硝子のモザイクを用ひてゐる。

大阪本店 人事職制

重役

取締役會長	板谷宮吉
取締役社長	土屋啓造
專務取締役	木水榮太郎
常務取締役	小川吉久
取締役	板谷順助
取締役	角田藤治郎
取締役	新谷專太郎
取締役	石田嘉男
取締役	横尾忠愛

部長

取締役	佐藤半
監査役	松本富藏
監査役	柴野仁吉郎
監査役	十合芳三郎
仕入部部長兼營業部長	角田藤治郎
營業部長	石田嘉男
企畫調查部長	佐藤半
總務部長	友部剛

課長

總務部會計主任兼本店會計課長	淺山富雄
仕入部商品調查課長	大江喜代造
十合化學研究部長	小松安太郎
販賣課長	後藤常吉
企畫部調查役	渡邊敬次郎
人事課長兼企畫部調查役	高瀬昌慶
仕入部豫算管理課長	曾我部完一
計畫課長	加多木榮一
御得意販賣課長	小竹宗一郎
庶務課長兼企畫部調查役	正村茂
仕入部仕入第一課長兼企畫部調查役	二宮健太郎

仕入部第二、三課長兼企畫部調查役

仕入部第四課長	中山馬太郎
仕入部第五課長	中村賢治
仕入部第六課長	筒井岩吉
地下、一、二階賣場長	福島光一郎
三、四、五階賣場長	高松忍
六、七、八階賣場長	三矢三六
商品管理課長	平工明美
商部外地課長	福田敏夫
商部販賣課長	久保清一
漢口出張所長	武田和三郎
北京出張所長	池邊定一
	曲尾光明

部署主任

絹着尺部	石橋康雄
染着尺部	小形正一
生地模樣部	正木儀六
半衿小物部	神谷廣夫
帶地部	三木一三
寢具部	高田清次
銘仙部	高野寅三郎
人絹洋反部	加藤久男
紳士雜貨部	吉本修
運動雜貨部	坪井定之助

婦人子供雜貨部	佐野亨
洋服部	天野六郎
紳士洋品部	加納由兵衛
婦人子供洋品部	多田篤隆
乳兒用品部	岡本伊一
シヨール履物部	田中昌三
化粧品藥品部	下村英一
時計小間物部	飯田健三
文具部	萬木祥太郎
書籍部	小寺惠
玩具部	辻文三
美術部	山村種徳

家具裝飾部	粗山岩男
家庭用品部	宮田二郎
臺所用品部	西村計三郎
食堂部	川崎藤太郎
菓子食料品部	島岡武雄
慰問用品部	青木正
專門店部	田井甚一郎
特選吳服部	中由平
仕立部	佐藤三木藏
企畫調查部	鯉田廣志
廣告庶務部	山口宏
廣告意匠部	佐藤英一郎

裝飾意匠部	山谷進一郎
教育部	木原繁實
人事庶務部	南勇
厚生部	橋本猛忠
保安部	一法師安善
同部	松井卓助
用度部	光島米三郎
電氣部	岩城文男
機關部	藤井勝三
計算部	淺山彌太郎
出納部	西岡末太郎
掛賣部	福島一郎



神戸支店

遠陽出張所	奉天出張所	漢口出張所	産業報國會 幹旋部	商事部外地課	商事部雜貨課	仕入部庶務主任	商品調査課主任	配 送 部	仕 入 室	檢 品 部
飯 島	齋 藤	富 田	喜 多	安 野	矢 野	林	谷 口	西 岡	木 村	谷 川
致 壽	季 雄	光 雄	作 衛	大 三 郎	有 吉	定 重	廣 次	杉 松	譽 富	駙 藏

神戸支店の沿革

神戸支店の創設は、別項沿革に記載せるやうに、明治三十二年四月、神戸市元町六丁目に出張所を設置したが、その濫觴である。

同店舗は、開設日ならずして、同年六月に、相生町二丁目（神戸驛前）に移轉すると同時に、名稱も十合呉服店神戸支店と改められ、呉服専門店として、デビューした。

これが、十合の神戸進出の第一歩であつたが、當時、十合呉服店の業態は、恰も、順風満帆の潮時で、三代目十合伊兵衛氏を中心とする十合重助、十合孝藏三氏の合作に依る合名會社の設立を機として、先づ、十合重助氏に依り、京都支店が創設せられ、待望の京都進出成るや、次いで、豫定のプログラムであつた、神戸進出が實現せられたと云ふ譯で、十合が、今日の盛態を築くに到つた第一歩は、本質的には、この京阪神に跨る、巴の布陣を敷いたことに創まると謂つて良からう。

つまり、合名會社設立から、神戸支店開設に到るまでの、二三年といふものこそ、十合にとつて、その五十年の歴史に、最も特筆せらるべき華やかな進軍譜を描いてゐるのである。兎もあれ、開設成つた神戸支店は、前田新藏氏を初代店長として、扇港に於ける、十合地盤の確保に向つて、全店員、一丸となり、陳列販賣に、將た外商に、慕ぐらの奮迅を續けたものである。

斯くして、業績は大いに擧がり、二年後には、元町五丁目に土地を買収し、翌年の明治三十五年五月を期し、相生町店舗を引拂ひ、元町五丁目に、支店の移轉を行ふとともに、益々吳服十合の聲名を、港に高からしめて行つた。

同時に、外商における顧客層は、市内は勿論ながら、沿線東部の御影、芦屋方面に、相當根強い地盤を有し、この方面に、力が注がれてゐたことに依つても、當時から既に東部への關心といふことは、没却され得ない事實であつた。

斯くして、年を逐うて、業礎は磐石の重みを加へ、大正時代に入つたが、大阪本店の業績また隆運の一途を辿り、大正九年、合名會社より、株式會社に、組織の變更が成るや、業態もまた、一新期を劃し、即ち従來の吳服専門店より、一飛躍して、雜貨をも併せて、取扱ふ

こととなつた。

これは、但し、毎月一回乃至二回、大阪本店より、流行諸雜貨を取寄せ、神港クラブを會場として、出張販賣的な賣出し本位の雜貨市として、開催せられたもので、店舗としては、依然、吳服のみの、陳列販賣に留まつてゐたのである。

大體、元町時代の店舗は、僅か、二百五十坪程度の賣場面積を有するのみで、二階はあつたが、これは主として、倉庫に使用され、その他約百五十坪の土間があつた位なので、吳服の他に、雜貨類まで、陳列することは不可能であつたのである。

猶ほ、當時神戸には、高島屋、大丸も、夫れ／＼出張所、支店を有してゐたが、同様、吳服を主とするものであり、十合が行つたと同様、高島屋、松坂屋もまた、神港クラブを利用して、雜貨市を開いた。この出張販賣的營業形態は、かなり永い間續けられ、百貨店時代に到る間の、過渡的な形態として、存在した譯であるが、業績も漸次昂り、これに、自信を得たことに依つて、愈々、昭和八年十月一日を期し、阪神三宮ビルの竣成とともに、百貨店經營の第一歩を踏み出したのである。

そして、開店當時は、まだ、三宮附近、小野柄通りは、今日の如き繁華街ではなく、隨つ

て、今日にみる市の中心地としての観はなく、唯、阪神電車、つまり大阪、神戸を繋ぐ交通幹線の終點百貨店としてのみに、意義が與へられてゐたかのやうであつた。

それにも拘らず、阪神電車終點は、昭和十一年四月、元町驛延長となり、随つて、同店の所在地は、中間驛となつて、從來の特異性を、かなり、減殺されるに到つたのである。

併しながら、反面百貨店の出現に依つて、附近一帯は、その後漸次、商店櫛比の状態を呈するに到り、今や、阪神は基より、省線、阪急、市電、バス等交通機關の集結と併せて、名實共に、神戸の門戸を扼する繁華街を形成するに到つた爲め、同店の位置と謂ふものは、所謂、ターミナル百貨店とともに、都心百貨店としての、二つの性格を附與されるに到つたことである。

偕て、話は前に戻るが、抑も、十合が、阪神ビルに着目して、此所に名實共に、整備した百貨店を開業するに到つた動機は、上述の如く、宿年の翹望が成つたかたちで、これと共に同店の東方勢力は、日とともに確保されて行つた。

また、百貨店の形態に遷ると同時に、それまでの店長であつた前田新藏氏は、第一線を勇退し、大阪本店から、角田藤治郎氏（現取締役仕入部長）が、支店長として赴任し、十一年

十月まで、縦横の才腕を振ひ、茲に百貨店としての基礎を確立した。

次いで、十一年十一月から、池田徳治郎氏（現取締役、販賣總監督）が、同様、大阪本店より角田氏と入れ替りに、三代目の支店長として赴任し、十四年二月まで、業績伸張に力を盡した。

その間、十三年七月五日の關西風水害には、地元百貨店中、最大の被害を蒙り、階下各部および一階に、浸水をみて、その損害も約三十萬圓と稱された程であつたが、池田支店長以下、全店員の不撓の努力が酬いられて、復興成り、神戸十合における、唯一最大の經營苦難時代を、見事に克服し得たのであつた。

そして、一方には、店舗の大増築計畫を樹て、本館東側隣接空地に、倍大となす設計が行はれたが、恰も、支那事變の影響をうけて、戦時下の鐵鋼材、その他建築資材の使用禁止に遭ひ、一時停頓の形に在つたところ、一部解禁に依つて、十五年十月二十三日、建坪四百坪地上一階、地下二階の増築落成し、約八百坪の新館賣場が出現するに到り、これに依つて、店舗賣場總面積は、約三千八百坪を擁するに到つた。

その間、十四年三月、池田氏と更つて、横尾忠愛氏が四代目支店長に就任、戦時下統制經

済の進展する最中にあつて、克く時流を達観し、時局下、消費面に相應しい販賣方針に依つて、着實なる經營振りを示し、現在にいたつてゐる。

店員數も、今や、八百五十人を數へ、益々、隆運に向ひつゝあることは、同慶に堪へないが、近く御影、住吉の合併に依る甲南市の出現を控へ、また、最近市となつた芦屋のほか、西宮市、尼ヶ崎市等、東方に有力なる消費部面と、顧客層とを有する同店としては、時局下百貨店の經營難が傳へられる折柄にも拘らず、前途は、愈々多幸と光榮に輝いてゐることを想はせるに、充分なものがあると謂へやう。

神戸支店の建物及び店内施設

建物、および店内施設に就いては、建物様式を近世復興式として、鐵骨鐵筋混凝土、地下三階、地上八階（塔屋共）の構造で、高さ一二一尺五寸、軒高一〇〇尺五寸、床面積一〇、八八一平方米、賣場面積八〇五四平方米、外装は鑄石イミテーションのテラカッター張り、内装一階床は全部トラバーチン、腰張りは高さ十尺まで大理石、二階以上床は全部フロワリング寄木張り、階段床はゴムタイル張り、七階食堂天井にはセロテックスを張りつめ、防音装置が施されてゐる。

起工は、昭和七年九月一日で、竣工は、翌八年九月二十日、工費約二百五十萬圓と稱されてゐる。

その後、昭和十五年十月、新館（地上一階、地下二階）約千二百坪、その内、賣場面積約八百坪の竣成に依り、店舗賣場總面積は、約三千八百坪となつた。

附帯設備としては、防火施設として、地上七階、地下三階及び屋上の、全部十一階の各階に、合計二十六ヶ所の消火栓を掘下げて、一晝夜約一萬石の測水量ある掘抜き井戸、二ヶ所をつくり、十五馬力の水揚ポンプ二臺で、屋上の水槽に汲み揚げ、平常は水槽便所等に使用し、火災の場合は直ちに、これを利用出来る。

このほか、能美式火災報知器を施し、全階を二十一區に分ち、天井に装置された毛細管内の空氣が、僅か紙一枚燃上つた温度だけでも、自動的に感じ、空氣の壓縮作用で、警報するといふ新式装置が施されてゐる。

また、各階階段は、全部防火シャッターつきの避難階段を兼ねてをり、店外にも、數個の双口消火栓を設備して、萬全を期してゐる。

次に、暖房装置としては、暖房は、換氣暖房、冷房は、高砂荏原式換氣冷房で、冷房施設は地下一階、一階、七階食堂に施されてゐる。

エレヴェーターは、客用四基、店用二基で、エスカレーターの設備はない。

このほか、十二尺平方の飾窓が三ヶある。

店内施設としては、各階配置は、

△地下二階 倉庫、事務室、電機室、機械室。

△地下一階 十合バーラー、理髮室、時計修理部、食料品、小鳥賣場、雜誌、文具類、玩具類、配送承り所、御買上品御渡場。

△一階 案内係、商品券、煙草、ポッフオト、現像焼付、寫真材料、實用品特賣場、慰問用品賣場、防空用品、紳士用品、家庭用品類、履物類、藥品類、化粧品類。

△二階 小物類、時計眼鏡、檢眼室、シヨールバラソル類、紳士雜貨、運動用品、ラヂオ、蓄音器。

△三階 婦人子供洋裝、乳兒用品、婦人子供雜貨類、洋服類、洋服更生部。

△四階 生地染物類、絹着尺類、帶地類、美容室、御得意様御用承り所。

△五階 寢具仕立上り品類、半衿風呂敷、銘仙類、綿布類、洋反類、新興着尺類、進物相談所、會社係、特免配給品賣場。

△六階 家具美術品類、催物會場、事務室、醫務室。

△七階 食堂、休憩室、講習室、自動電話室。

等となつてをり、七階食堂は、客席三六〇を有し、窓面積の廣いため、採光も充分で、料理

は和洋支を合せて、現在は、數十種に制限してゐるが、他に、喫茶も兼ねてゐる。屋上には、遊歩道を兼ねた、小公園風な庭園が設けられ、稻荷大明神が祀られてゐる。なほ、新館擴充に依る賣場移動は、地下一階に、食料品部が大擴充されたことと、バーラ及び理髮室が生れたことと、また、一階では、實用品特賣場の創設とともに、慰問品、防空用品、家庭用品、寫真機、神戸に始めてのポリフォト撮影室等が出來たのであるが、新館の意義は、主として、實用品特賣場の創設、及び食料品部の擴充にある。

神戸と百貨店

神戸市と、百貨店とに就いては、頗る興味ある挿話がある。

大體、扇港に、最初に進出した百貨店（尤も、當時は呉服店であつたが）は、高島屋で、元町二丁目に、明治三十四年に、神戸出張所（當初は、京都店管轄）を開設したのを以て、嚆矢とする。

十合が、神戸支店を開設したのは、その翌年で、矢張り當初は元町である。

その後、一時、相生町（神戸驛前）へ移轉してゐたが、再び、元町へ戻つてきた。

そして、明治四十一年には、大丸支店が、現在元町食堂となつてゐる個所に創設され、互ひに呉服店として、鎬を削つてゐた。

そのうち、高島屋は、大正十一年、大阪長堀店開設と同時に、勢力を茲に集中する意味で閉鎖、引揚げを行つた。

つまり、一番最初に進出しながら、一番早く引揚げて了つたのである。

當時、神戸には、最初の百貨店として、元町デパートが存在してゐたが、業績は決して、香ばしいものではなく、そのうち大正十五年、三越が進出し、大阪支店神戸分店を開設するや、店舗を買収されることとなつた。

そして、元町へ蝟集した各店のうち、元町へ根を下したのは、三越だけで、他は、何れも元町から引揚げて了つたのである。

即ち、高島屋が引揚げたのを最初として、昭和二年には大丸が、現在の三宮店舗竣工とともに移轉し、更に十合は、昭和八年、阪神三宮ビルの落成とともに、同様移轉するところとなつた。

百貨店の濫觴時代には、期せずして、一樣に、元町へ集つたものが、言はず語らずの裡にどれもが、元町へ袂別したのである。

勿論、その理由は殊更、詮索するまでもないことである。お互ひが、一呉服店である時代は、目と鼻を突き合わせてゐても、良からうし、殊に、ショッピング・センターとしての、地理的條件からも、此所に集中したのは、當然であらう。

だが、併し、百貨店となれば、然うはゆかない。況して、神戸は帯のやうに、横に擴がつた都會であつて觀れば、夫れ／＼の經營政策からいつても、分散すべき必然性が有つたと謂ひ得やう。

そして、西に三越、東に十合、その中央に大丸と、人口百萬の扇港を、三分して、各店の布陣が成つた譯であるが、さりとて、三店の顧客層が、地域的に、整然と區別されてゐるか云ふと、然うはゆかない。

三越が、西方の股販産業地帯確保に力を注ぎ、十合が東方住宅地帯の地盤固めに、不休の努力を傾けてゐるとは云へ、その反面には、互ひにセントラル百貨店としての抱負を以て、優識性を誇示してゐる以上、更には、大丸が東方といはず、西部といはず、自在の活動を續け來つた從來の經緯にみると、その顧客層は、夫れ／＼一部の特殊階層を除いては、殆んど共通してゐると、看做さねばならず、それだけに、各店、今後の業態こそは一層、注目せられることとならう。

偕て、元町と百貨店との關係に就いて觸れた機會に、此處で、特筆すべき因果關係を紹介して置かう。

それは、上述したやうに、各店が、夫れ／＼元町を引拂つたことから、元町ショップ・ストリートの両端、つまり西に三越、東に十合が出現したことに依つて、それまでのショップ・ストリートが、その意義を喪失して了つたことに因る。

百貨店にその両端を扼された元町通りは、遂に、ブロムナアド・ストリートと化し、商店街としての機能は、著しく減殺されるにいたつた。

茲において小賣商の百貨店に對する感情は、日を逐うて激化し、例の百貨店法を生ましめた百貨店排撃の烽火は、六大都市中で、神戸が最初であり、同時に、最も熾烈であつた譯である。

ところが、愈々、百貨店法が制定され、百貨店が、或る程度抑制をうけるやうになつて、小賣商側も、漸く餽飲を下げ、その後、兩者間の摩擦も、漸次、下火となつて行つたが、支那事變の勃發を契機として、各般の統制時代に入り、今日では寧ろ、百貨店法は、百貨店保護のために存在するやうなかたちとなり、小賣商としては、今更、何であんな法律を作らせたのだらうと、苦笑してゐる有様だ。

神戸支店 人事職制

支店長

横尾 忠愛

課長

販賣課長	大地 定治
御得意販賣課長	積山 昇
賣場長	平山 梯次郎
會計課長	大西 政太郎
人事課長	引田 芳夫
庶務課長	岡 壯亮
賣場長	長畑 堅四郎

部署主任

絹着尺部	平工 忠男
生地模様部	中島 昇
半衿地物部	中川 勝四郎
人絹洋反部	森武 三
銘仙部	藤井 源治
寢具仕立上品部	江部 昇治
家具裝飾部	筑田 太治郎

家庭用品部	田中章
シヨール履物部	平工義夫
紳士洋品部	城井時雄
紳士雜貨部	河内實三郎
婦人子供雜貨部	奥村麟
洋服部	大倉勇
婦人子供洋服部	龜澤勝太郎
文具部	金子啓四郎
玩具部	柳太之佑

食堂部	野上與作
食料品部	樽谷豐
支店長室文書	牧野豪傑
廣告部	小川常一
在立部	仲家稔
人事庶務厚生部	中島秀夫
教育部	杉村嘉正
保安部	菅善雄

計算法部	中村佐平
出納部	芦川義太郎
點檢部	堀川義信
營繕部	芝原常藏
配送部、仕入室	飯田壽雄
御得意販賣課長	長部吉次
特別御得意係	岩田重次郎

第一御得意係	山下克巳
第二御得意係	仲幸四郎
官廳會計係	岡田力三



店員施設

店員の福利施設

店員の福利増進に關しては、それが、特に年少の男女店員を多數雇傭してゐる關係上、保健の問題、徳性、情操の涵養に關しては、相當注意努力を拂つてゐるのであるが、現在、之れが施設としては、大要左の如きものがある。

|| 保健施設 ||

一、醫務室

常勤醫師、並に看護婦を置き、店員の健康診断、治療に應じ、應急手當、實費投薬を爲す外、諸種の健康相談に對し適切なる指示を與へ、積極的に、店員の健康増進を圖つてゐる。尙、常勤醫師以外に、北野病院内科長、石田準美博士が、毎週水曜日に出張し、特別診断

の需めに應ずることとしてゐる。

二、店外醫院特約

醫務室以外に、店外に在る各科醫院と特約し、店員及び店員家族の治療、及び入院に就いて、入院料、薬價の割引をしてゐるが、現に、店と特約のある醫院には、財團法人北野病院、藤森病院、長谷川耳鼻咽喉科、小川齒科醫院等がある。

三、職員健康保險法實施

昭和十五年六月、職員健康保險法の實施に伴ひ、當店に於ても、月俸百圓以下の店員を、組合に加入せしめ、規定に依り醫療費の定率負擔、傷病手當金の支給、出産には、分娩費、出産手當金の支給、死亡には、埋葬料等、夫れづ給與支給があるが、その組織の概要は左の通りである。

(A) 組合員

事業主と、使用せらるゝ被保險者とから成つてゐる。

(B) 組合組織の概要

組合に於ては、組合會と、理事とを有し、組合の事務を行ふのであるが、組合會には、撰定、互選に依る議員數名を置き、理事にも、撰定及び互選に依る理事數名を有する。

(C) 保險料の概要

被保險者の負擔する保險料率は、一分三厘にして、一級より十級まで區別をなし、標準報酬、月額に保險料率を乗じたる金額を以て、保險料とする。

四、保險給附の概要

(A) 被保險者の保險事故に對し、組合の指定したる保險醫に對し、療養に要する、費用の八割を負擔する。また、保險醫以外の場合に於ても費用の算定をなし、療養費の一部を、負擔するものである。

(B) この外、傷病手當金として、四月目（日給者に付ては十一日目）から、標準報酬、日額の五割に相當する金額を支給する。但し、同一傷病に就いて、三月間（日給者に就いては六日間）にて打ち切る。

- (C) 女子被保険者の分娩に際しては、分娩費として、二十圓を支給する。但し、産院の收容、助産の手當をなした場合に於ては、十圓を支給する。
- 尙、分娩費の外に、分娩前四週間、分娩後六週間の休養期間中、標準報酬、日額の五割の出産手當金を支給する。
- (D) 被保険者の死亡に際しては、被保険者に依つて、生計を維持せる者に、埋葬料として、最低三十圓の金額を支給する。

五、保健施設

被保険者の健康を、保持増進する爲めに、左の如き保健施設を有する。

- (A) 疾病又は、負傷の豫防に關する施設。
- 即ち、健康相談、種痘、チフス等の豫防注射、寄生蟲驅除。
- (B) 健康診断に關する施設。
- 一般的健康診断、早期診断、寄生蟲検査、血液検査、其他の反應検査。
- (C) 其他、健康の保持増進に關する施設。

榮養改善、體育獎勵、その他、衛生思想涵養等に關する施設。

六、國民體力法に依る體力検査の實施

昭和十五年九月、國民體力法に依る體力検査の實施に伴ひ、當店に於ても、之れが實施に當つては、石田準美博士をして、國民體力管理醫に任命され、博士指導の下に、要検査被管理者全員に對して、嚴重なる體力検査が、實施されることとなつてゐる。

尙、體力検査の結果、成績、並に指導、その他の措置に關する記事を記載せる、體力手帳を交付し、以て、將來の體力、向上に關する指針を明かにしてゐる。

七、體力章檢定の實施

當店、従業員にして、年齢二十五歳迄の男子従業員に對して、自己體力の反省、自覺と、體力運動とを日常生活に織り込みしめ、以て時局下、中堅青年の體力増強を圖る爲めに、體力章檢定が實施されてゐる。

尙、檢定標準は、初級、中級、上級に區別され、右標準合格者には、夫れづゝ級別に應じ

て、厚生省より、體力章を授與せられることとなつてゐる。

—— 寄宿舎設備 ——

男子店員の爲めに、寄宿舎「十合日新寮」がある。

場所は、東區餅差町一九三番地、高津中學校の東隣で、近くに、眞田山公園を控へ、閑靜で、交通の便も好い。

男子寄宿舎は、既に大正三年九月以來、同所に建築されて居つたが、昭和九年九月、關西地方の風水害の際、倒壊の厄に遭ひ、長く放置してあつたものを、同じ敷地に新築したものであり、昭和拾四年十一月起工、昭和拾五年二月の竣成にかゝり、總延坪九五坪、建坪四七坪の、木造スレート葺、二階建築である。

—— 運動娛樂施設 ——

一、スポーツ俱樂部

店員の體力増進を圖る爲め、各種のスポーツ俱樂部が設立され、各自の好むところに、入會し得ることとしてゐるが、一般的なハイキング部を始め、陸上競技部、水泳部、野球部、庭球部、卓球部、劍道部、スキー部等があり、對外試合にも進んで、選手を出場せしめるやうにし、大いに運動競技を奨勵し、相當優秀な成績を示してゐる。

二、女子店員趣味の會

女子店員に對しては、趣味を兼ね、情操を涵養する爲め、お花の會、お茶の會、書道の會、コーラス團等があり、大いに喜ばれてゐる。

また、女子店員の親睦を計る「なでしこ會」、更に國防婦人會を組織し、對外的に相當の活躍をなしてゐる。

三、大運動會開催

毎年五月に、全店員の大運動會を開催する。阪神甲子園球場、寶塚運動場等を借り切り、神戸支店と、聯合で行つたこともあり、或は、また時局的趣向を加へ、橿原神宮參拜大會と

する等、店員の親睦を兼ねた野外大運動會を、大々的に行ふのである。

四、夏季臨海休養所開設

毎年七、八月の二箇月間、南海沿線濱寺海岸に、夏季臨海休養所を開設し、電車割引券を發行し、水泳者の便を圖り、大いに、「夏に鍛え」しめるのであるが、春の陸上大會に對し、夏の水上大運動會を開催するのが、毎年の例となつてゐる。

—— 教養、共濟施設 ——

一、十合實務女學校

女子店員、二十歳未満の高等小學校卒業者に對する、補習教育的意義を持つもので、私立青年學校令に準據する實務學校であり、修身公民科を始め、國語、國史、商業、珠算、習字體操の各科を課し、本科二年修了となつて居り、授業は、勤務時間を割いて行はるゝもので全科程終了者に對しては、昇給に就ても特別に銓衡することとなつてゐる。

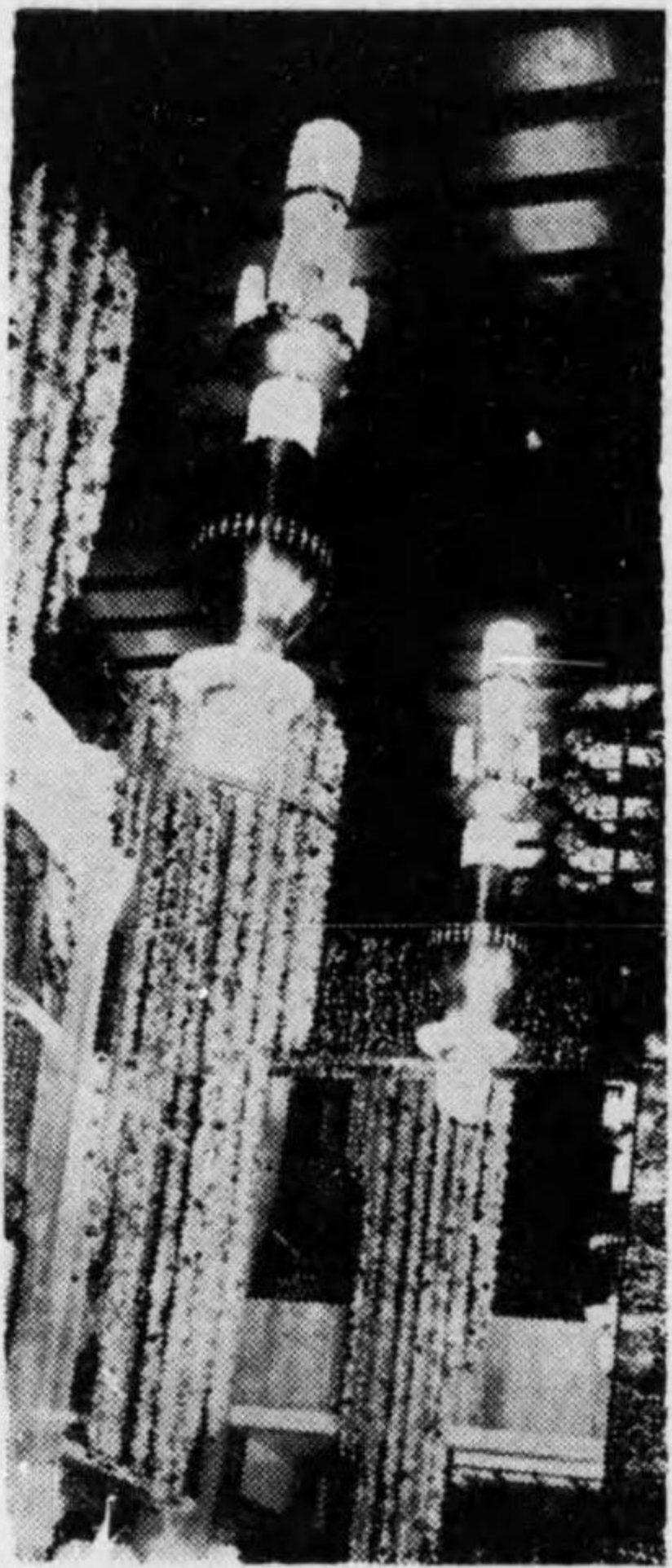
二、共濟部

店員の共濟機關として、合誠會があり、慶弔金、病氣見舞金の支出、資金の貸出を行つてゐるが、之れに對し店は、相當の補助金を支出してゐる。

吾等のつとめ

- 一、祖國あつて、わが身あり、吾等の店あり。
店は、同胞の爲に生れ、吾等、これを守る。
店こそ、吾等、祖國へ奉公の持場なり。
讃えん哉、此の店。吾等の國土。
- 一、店の信頼あつて、吾等に、歡喜の精進あり。
店の温情あつて、吾等に、報恩の赤心あり。
店こそ、吾等の、美ましき樂土なり。
守らん哉、此の店。吾等の持場。

- 一、人集つて、規律あり。統制あつて、力生まる。
上長挺身力行し、衆相應じて奮進す。
店こそ、吾等、鍛錬の道場なり。
努めん哉、店のために、祖國のために。



回
顧

想ひ出を語る

大阪をこごうは、天保の初年、十合伊兵衛氏が、郷里大和から出で、座摩神社の北隣に、古着商を営み、大伊、又大和屋と稱したのに創るが、現在の心齋橋筋に舗を構へ、呉服店となつたのは、明治五年のことである。

爾來、春風秋雨、七十年を経過、當時の従業員は、いづれも物故し、従つて、創業前後の状況は、知る由もないが、呉服店から、百貨店への轉換期である明治三十年代の従業員は、現常任監査役池田徳治郎氏、取締役仕入部長角田藤治郎氏、賣場長高松忍氏、商品管理課長福田敏夫氏等、いづれも健在で、そごう現幹部として活躍中であり、この轉換期のそごうを聽くのも、温故知新、決して、徒爾ではないので、當時のそごうを、熟知して居る前記長老幹部を圍み、去んぬる日の夜、「そごうの今昔を語る」と題して、座談會を開いた。

以下、當夜の記録で、出席者は左の如くである。

常任監査役	池田 徳治郎	取締役仕入部長	角田 藤治郎
営業部長	石田 嘉男	販賣課長	後藤 常吉
賣場長	高松 忍	同	三矢 三六
同	平工 明美	商品管理課長	福田 敏夫
得販課長	小竹 宗一郎	同	
商品調査課長	大江 喜代造	仕入課長	筒井 岩吉
同	二宮 健太郎	同	中山 馬太郎
同	中村 賢治	(順序不同)	

角田 今度、そごうの記念誌が編まれることになりました、店の歴史を語るものがないかと云ふことになり、私も、その一人に頼まれましたが、さあ、さうなると、いい加減なことは云へず、困つてしまひました。

そこで、木水さん初め、池田さん等から、店の古い記録や、寫眞、その他を拜借するやら、色々して、出来得るかぎり、まとめて見たのですが、なかなかこれで、完全と云ふわ

けにはいきませんし致しますので、店の古い方々に、集つていただいて、なにかとお話願ふことの方が、よからうと云ふことになり、ここに、皆様のお集りを願つた次第であります。

で、これから、「そごうの今昔を語る」と題しまして、座談會に移りますから、皆さんの御入店になつた頃のことからの思出、その他なんでも、結構でありますから、お話願ひたいと存じます。

高松 賣出しの話からでも、初めませうか。

昔は、夏物六月、冬物十月(せいもん拂)の二回限りでありましたが、明治三十九年頃から、四月のお花見衣裳賣出しなどが大當りとなり、十二月の歳暮や、年の市、七月のうすもの中元賣出しと、だん／＼賣出しの回数が殖へて、二月、七月の藏さらへなど、その後、大正に入つては毎月、月の初めには、何か賣出しをするやうになりました。

角田 さうでしたね。店が、鰻谷の南西角にありましたが、私が入店した明治三十三年にはもう、現在の位置に移つて居ました。

その頃には、店にも、相當なものが居りましたよ。番頭でも、丁稚でも、仇名のつけ合

ひをして、すごい名前がありました。例へば、ベストの藤吉とか、般若の何んとかと云つて、(皆、爆笑!) 此連中が、それは幅を利かして居て、商賣も却々上手でした。今日、こへ、日露戦争當時の賣出しの封筒や、繪葉書、または、店の廣告、チラシの類を持つて來ましたが、呉服店として、宣傳用の繪葉書をこしらへたのは、當店が初めてせう。

然し、この繪葉書は、店の廣告を入れたので、とうとう、日の目を見ずじまひになりました。

この時代には、店も、上村松園女史に描いて貰つた、美人ポスターの豪華なものとか、衣裳界(流行の紹介雑誌)、その他寫真とか、色々なものをこしらへたものです。

當店の最初のポスターは、店で、服装の展覽會をやつた時でして、ここに、その寫真があります、これこそは、歴史的の寫真であります。丁度、鐵道五千哩競争などがあつた時で、そごうが、呉服屋から百貨店への轉換期でありました。

高松 汽車博覽會と稱して、各都市を巡業の博覽會がありましたな。また電話販賣と云ふのが出來ましたのは、たしか三十九年か、四十年頃だと思ひます。が、常に御得意先へ、注文聞きの電話をかけて、随分やつてましたな。

角田 あの頃は、色んなことが、はじまりましたね。女店員の初めは、明治三十六年ですね。出勤簿の出來たのも、その頃です。私は、役人ではあるまいし、そんなものは使はぬと、意地になつて、當時、判など捺さなかつたものです。

福田 店員の寄宿合は、いつからでしたかしら。

角田 寄宿合はありました。その頃の寄宿合は、御池橋西詰を、南へ行つた西側でした。その後清水町に移り、寄宿合として整ふたのは、東區餅差町味原池の側に、建つた頃からです。メッセンジャーは、明治三十九年頃でしたかな。

大江 さうです。メッセンジャーの初めは、私です。私は入店した時、メッセンジャーをやらされたのですが、その時、初めてメッセンジャーボーイが店に出來たのです。當時却々スマートな形で、走つたものです。

高松 最初に、何人位おいたかな。

大江 十人程です。仕立物を運ぶぐらゐの仕事だつたのです。初めは、愉快でした。メッセンジャーは、駆けすり廻るのだから、疲れるだらうと、毎日、鶏卵を五ツ六ツと、牛乳二本を吞まされたものです。

驚見 君のメッセンジャーは、可愛かつたらうな。——爆笑——

大江 メッセンジャーは、珍らしくて、當時、新聞記事になった。

石田 メッセンジャーの店の地位は、どの邊でした。

大江 小店員の上のクラスです。

高松 販賣員になる、少し手前です。

大江 私は、メッセンジャーをやりましたので、番頭さんの車は、挽かずじまひでした。

福田 火事があると、よく走りましたな、揃ひの印判纏に、甲斐絹の腹當などを造つて、イナセな形で、いざ、火事があると高張提灯、小提灯の勢揃ひで、蒲鉾を持つて、見舞に行つたものです。そして、ついでに、店の宣傳をしたものです。當時は各店共、この火事行競走をやつたもので、足自慢の連中が、却々居りましたよ。

天満や、野田阪神ぐらゐは、苦なしに走つて行つたものです。

高松 毎晩、火事番と云ふのがあつて、店の火の見に上る人間が、決まつて居ましたな。

高松 女店員を、始めて採用して、相當効果を擧げたのは、明治卅六年頃でしたな。

池田 井野邊、松井、島岡など、却々腕利きで、中でも松井は、一番美人でしたな。

福田 その時分、月給もよかつたやうに思ひますが。

大江 私は、ただでした。まつたくの月給なしでした。

後藤 半期たつて、一圓貰ひましたか。

高松 明治四十年頃までは、丁稚は、ただせう。月給を、丁稚が貰ふやうになつたのは四十年からでしやう。もつともお祭には、小遣と、正月と中元に、お贈物はもらつて居たが。

正村 四十四年頃には、もう、月給でした。小職員でも、月給を貰つたものです。

高松 小店員の、月給になる始めの動機を話しますと、一體、私が、店員になつた當時も、小職員や店員を集めて、よく茶話會をやつたのですが、その當時は、小職員には、給料がなかつたものです。そこで、小職員にも、給料を出して欲しい、と云つたやうな意味の話が出ました。處が、その翌日、私は鹽町の主人、當時大阪店の店長に呼ばれて、どんな話が出たかと、質問されましたので、小職員が、月給制度を盛んに希望してゐます、と話しましたら、その後、間もなく小職員も、月給制になつたのでした。

平工 私などは、半期ただで、次の半期から五十錢貰ひました。そして、三年たつと、制服

と云ふことになり、十二圓給料を貰ひました。

福田 元服すると、ガスの羽織を頂戴して、着たものでしたね。

高松 全部が、月給になつたのは慥か、明治四十年のやうに、記憶して居ます。

新館の隅ツこでみんなでお茶を呑んで、月給の待遇問題が出ましたので、危険思想の集合のやうにとられたのですが、それから、すぐ全店員が給料になりました。

角田 木村君が、半島人を雇つたことがありましたね。

高松 日韓合併後で、思想融和の爲め、府廳から、懲罰されたためでせう。半島人が来たのは、大正になつてからではありませんか。十五人許り入れたと思ひます。鮮人でも、なか／＼確かりしたものがありません。店をやめてから、検定を受けて苦學して、後で、同志社の特待生になつた男がおります。いまだに、手紙を寄越しますよ。

平工 私も、結婚の通知をもらひました。名前を、何とか云ひましたね。

高松 あれは、金東方と云つて、小店員の仲間で、鳥渡演説もうまかつたものです。

後藤 斥候と云ふのがありましたね。いま、どこの店には、何人客が這入つて居ると云ふやうに、他家の店の状況を、偵察に行つたものでしたが。

高松 斥候の初まりは、明治三十六年頃のやうに思ひます。

池田 斥候と云ひだしたのは、さうかも知れないが、さう云ふ他家の状況視察は、明治三十二年頃から、やつて居ました。

他店は、今、何人位這入つて居るか。それ、行けと、飛んで行つたものでした。

後藤 大抵、時間は、一日二度、定期に定つてゐました。

高松 當時、大丸は殆んど標的にして居なかつた。白木屋もありましたが高島屋が主な目標でした。

池田 高島屋が、主でしたね。

平工 休憩室に、お菓子がありまして、平素、お客に出してましたな。角形で、店の印の入つたものが。

高松 ズット以前は、お子達には必ず、お菓子を出したもので、お子達に、お菓子が出るとお客様は、必ず御買物が多くなつて、結構でしたな。

石田 池田さんや、角田さん邊りが、入店された順に、その當時のなにかと、興味のあるお話があると、結構かと思ひますから、當時の模様をお話願へませんか。

池田 私は、明治三十年に入店しました。そして、三十九年の十二月に、一時退店して、翌四十年十二月、京都の方へ、歸參が叶つたと云ふわけで、また、三十七八年の戦争當時、歸つたりして居りますので、途中で、鳥渡切れて居りますが、三十年に、店へ入りました當時の店員の数は四十名でした。

そして、その頃、賣上は、一年十八萬圓から、二十五萬圓の間を往來して居ました。その當時、一千圓も一日に商賣が出来ますと、大騒ぎで、御馳走が出たものです。で、一千圓をつくらふと云ふ時は、もう五十圓、あと三十圓と、一生懸命でした。

當時は、夜間營業をやつて居りましたので、もう僅かで一千圓にならうと云ふ時には、十一時半の、芝居の閉場のを待ったものです。それは、芝居歸りのお客が、吊切れを買ふからです。

夜の營業、つまり、夜間營業は、百目蠟燭をつけてやつたものでして、今日から見ると正に、隔世の感があります。

店の賣場員は、正面に四人、横に二三人、そして、傍に名前入の臺硯と、算盤を置いて控えて居たものです。

夜間營業の後に、藏を整理して、それから寝るのですから、寝る時刻は、たいてい二時頃でした。

藏は、前藏と、奥藏と、二つありまして、前には季節のもの、奥には季節外のものが入れてありました。

そして、その中間に、仕入部があつて、仕入部長は、十合芳三郎さんの養父の、伊兵衛さんがやつて居られました。

番頭には、小僧が一人づつついて居りまして、番頭の命をきいたもので、お客は、店の土間に腰をかけ、大口のお客は、上へあげました。番頭の成績は、個人賣上の賣帳と云ふのがあつて、これに書入れ、帳場で判を押してもらつたものでした。

勿論、その頃の帳簿は、大福帳式で、この賣帳は米の通帳のやうなものでした。帳場には、店の最高の位置にある人、まあ主人系の人が、坐つて居たものです。

心齋橋筋で、當時一流の呉服店と云へば、丸龜屋事田村呉服店、小大丸、大丸、フジャス等で、この他に、日本橋筋に、赤大丸、松屋町に丹波屋、新町通恵比壽屋、御堂筋の小橋屋などがありました。

この時分は、朝六時になると、もう二十人位のお客が、店の前に開くのを待つて居られたものです。呉服物の賣價は、御召が一流品で四圓九十錢、紋御召八圓九十錢、銘仙が正で五圓五十錢と云ふところでした。

新柄の吊布は、そごうが初めてでした。初め、吊布は紅木綿、ウコンなどでしたが、これも、そごうが最初で、吊布と見切反物で、大いに好評を博したものです。吊布は、反物の切つた残りを、店頭で吊つたのですが、これが、當つたのですね。

私は、入店した時の名前は、藤吉で、それから三年目に、元服してつまり、番頭になつて與助と云ふ名前になりました。

ところが、ここで、試験があるのです。實務試験ですね。仕立物、染物等、取扱商品の商品智識を試められるのです。私は、前田さんと云ふ人が、試験官でやられました。

店員の休日は、盆正月と、四月三日の大ドンタク、それに、夏祭の夜、出してもらふからんで、賣上のいい日には、御馳走が出ました。

そして、賣上をよくすると、上からお褒めの言葉があるからんで、別にたいしたことはなかつたのですが、これが嬉しくて、一生懸命に働いたものでした。一日と十五日には、

魚が出、また酒も出ました。酒は當時、一升六錢、ウドンは一杯五厘でした。

角田 女店員の初まりは、明治三十六年ですね。明治三十六年の四月には、第五回内國勸業博覽會が、大阪で開れましたが、この展覧會が、更に、大阪發展の契機となりました。

高松 その内國勸業博覽會の開催は、實際大阪のあらゆる方面に、刺戟を與へました。それと同時に、商賣と云はず、何と云はず、すべてのものを、目覺めさせたものでした。私はその年に入店しましたが、……

角田 當時、ウィンドーのあつたのは、當店と、高島屋だけでした。三十六年には、店も新機軸を出したのですが、その後三十九年の改築から、下足は預りました。

それから、商品の陳列販賣をはじめたり、從來の、所謂呉服店から、一步踏み出して、雜貨類を取扱ひ、季節的な催しを始めたわけでありませう。

明治三十六年には、明治天皇が大阪に行幸になり、心齋橋筋を馬車でお通りになりましたが、道幅が狭まいので、私などは勿體ないほど、近く奉拜したものでした。この時は店も、奉祝の裝飾をしましたが、當時呉服店で、裝飾をやつて居たのは、そごうと、高島屋だけでした。それから、この年は博覽會で、あらゆる方面の景氣がよく、忙しくて、私

は、博覽會の協賛の旗の注文とりで、走り廻つたものでした。

福田 店の改築は、明治四十年ですが、三十六七年頃は、まだまだ一般には、販賣に坐賣をやつて居ましたが、そごうでは、一々藏から出して、お客に見せて居るのでは、間にあはなくなつて來ましたので、陳列式に改め、誓文拂、その他の賣出しには、下駄を預り、お客を上にあげることになりました。

石田 大阪で、卒先して、百貨店の形式をとりだしたのは、そごうですね。

高松 さうです。そごうが、初めてです。

明治三十七年に、三越が百貨店になりました。そこで、そごうも、さうした氣運にありましたので、主人側では、幾度も上京し、三越を見學する外、三越の幹部とも會ひ、そごうを、百貨店とする準備にかかる一方、改築前後から、店の形式を、百貨店に改めて來たのです。

その最初は、雑貨が、店に這入つて來ました。主として、紳士用のもので、次にショール、履物、また化粧品、美術品が這入り、三月と五月には、雛人形や、五月人形も、扱ふやうになりました。

角田 そごうが、百貨店の様式に改つたのは、明治三十九年からで、四十年には、表側土蔵造り、本館に中庭を置き、その周圍に、三階建の建築を完成しましたが、これからは、丁度、百貨店の出發點とでも云ひますか、ウインドーの陳列も、本式になりましたが、なかなか凝つたものをこしらへたものです。

ウインドーなども、芝居の舞臺面をこしらへたりしましたが、これが、有名になり、心齋橋の人氣を、獨占したものでした。

高松 この頃の建物は、本館二階建て、新館は三階三棟で、中庭を置き、その庭の周圍に、催物場、美術部、食堂及び休憩室があつて、奥まつた所に、貴賓室がありました。

女店員も相當採用されるし、電話係が置かれるし、また催物もはじまりました。當時、人目を惹いたものは、中庭で、二階から瀧をおとしたり、また螢を飛ばしたり、春は櫻にポンポリ、秋は紅葉をあしらひ、更に小禽や、小猿なども置き、季節毎に、相當金をかけて、裝飾をしました。

そして、店内も色々改革されて、職制も出來たわけですが、店員は幹部、幹部補、それに、正店員、準店員、小店員と云ふことになり、店の組織は販賣部と、外賣部と、庶

務部の三部制が生れたのです。

角田 食堂の初めは、壽司、汁粉、おはぎ、珈琲などでしたね。

福田 洋菓子もありました。

高松 その當時は、店としては、劃期的とでも云ふ時で、催物など、大飛躍をしましたが、これは單に、店内ばかりでなく、新聞社とタイアップして、住吉や、濱寺、香爐園などで進出して、なにかとやつたものです。

とにかく、この時代は、店として全部が革新で、記帳も、従來の大福帳が、簿記帳にかはり、すべてが新様式になりました。

石田 それまでは、例の結果と云ふのがあり、あの中で、帳面をつけて居たのですか。

高松 さうです。

石田 通信販賣は、いつからでしたか。

角田 明治三十九年からです。初めは、衣裳界とか、なんとか、流行の機關誌を、お得意へ送つたものです。

高松 地方巡業は、明治三十七年からで、最初は、店の廣告の意味で出たので、九州の福岡

長崎、下關、廣島と廻つたものです。

福田 その後、近畿、中國、四國位を巡業賣出しをやり出しました。見切品を持つて行つて大いに、好評を博したものです。この地方巡業は、とても忙しく、寝る暇もないくらいでした。初めての土地へ行つて、家は借らなければならぬ、新聞廣告はしなければならぬ、チラシは配らなければならぬで、その上、賣上の状態を見て、次のプランをたててゆかなければならなかつたからです。

角田 それでは、大正八年には、大阪のデパートで、始めての鐵筋コンクリート建の店になつた、その當時の感想を、誰れかお話し願へませんか。

石田 大分、近い事ですから、皆さんは、御記憶が相當ある事と存じます。

大江 その頃までは、雜貨や、美術などを取扱ひ、陳列販賣を致しましたが、それまでは、呉服店の域を脱して居りません。この改築で本式に、百貨店になつたやうに思ひます。

後藤 建物も、相當立派になつて、人氣を呼びましたが、エレベーターが出来、電氣時計もその頃、珍らしがられましたよ。

高松 始めは、四階建て、相當廣いと思ひましたが、一二年して、だん／＼狭くなり、五階

建に建て増して、工事が行はれました。それから四階に、催し場があつて、色々の催し物を次から次へと計畫して、可なり世間から、騒がれた事を、覚えて居ります。

角田 では、まだ色々面白い話もありますが、この邊であとは、百貨店として發展し、大正九年に、株式會社になつたのですが、明治末期からはもう、皆が知つて居られることですから、それ等のことは、他日にゆづり、本座談會はこれで、閉會致します。

明 裳 會

- | | |
|-------|-------|
| 千總商店 | 川島織物 |
| 矢代仁商店 | 丸居商店 |
| 矢代庄商店 | 三宅清商店 |

京都市四條通室町東入
株式會社 吉野藤京都店

電話 園本局 ② 四九三番

電信略號

發信(〇ト)
受信(ケフトウラギヌヨシノ)



リファインテックス
本絹國基レインコート
株式會社 竹馬商店

本店 神戶市神戶區元町三丁目
大阪販賣會社 大阪市東區安土町四丁目心齋橋
東京支店 東京市京橋區銀座四丁目
京都支店 京都市中京區御幸町六角下
大連支店 大連市中山路
奉天支店 奉天市通一七(同馬洋行)

メリヤス雜貨部

西村理兵衛商店

大阪市東區小橋西之町一ノ六
電話 南 八八〇〇番

フエルト帽體
各種帽子
平面フエルト生地
製造販賣

株式會社 堀拔帽子製造所

本社 兵庫縣伊丹町
電話 伊丹 五五五③
尼崎 一二〇三
支社 近江、奉天、上海

子供ブラウス
婦人セーター
毛メリヤス

製造販賣

先田勇次郎商店

大阪市天王寺區堂ヶ芝町五十六
(市電細工谷停留所前)
電話 天王寺 三六〇九番
七八〇五番

三光鳥印
白鷗印

製造發賣元

高級皮革、囊物製造卸商
株式會社 玉置伊助商店

大阪市東區博勞町三丁目一〇
電話船場(83) 長 七五九番
一三八二番

金屬雜貨
化粧品製造

萬伸社

大阪市南區安堂寺橋通一ノ四三
電話船場(83) 三二二五二番
三一九二番

諸紙商

安田勉三商店

大阪市東區備後町一ノ四一
電話本町(24) 一九四六番

株式會社

泉谷時計店

大阪市北區中之島
常安町一九番地
電話土佐堀(44)一三三四番
一三五七番

春木眼鏡店

大阪市南區末吉橋通四丁目
(心齋橋筋)
電話船場一一三一番

家具・室内裝飾一般

登美屋

神戸營業所 神戸市神戸區北長狹通二丁目
(トリアロト下會館高梁下)
電話葺合七七九八番
大阪卸部 大阪市此花區對込町十一番地
(中央市場北西角)
電話土佐堀(44)四二六二番

西陣織物帶地問屋



岡慶商店

京都市西陣中筋大宮西入
電話長西陣④一〇二番

幼兒向洋裝製造卸商
新案ケーブオーバ發賣元



網田平吉商店

大阪市西區北堀江御池通二丁目
電話新町(53)四七二六番

各種樂器

合名
會社

阪根樂器店

小賣部

大阪市南區末吉橋通四丁目
(心齋橋北詰)
電話船場二四六〇三番

大阪心齋橋

松竹

室內裝飾圖案設計
店舖改造
應接室用セツト
洋服タンス・机
本箱・整理タンス
事務用家具洋家具

製造卸商

三村兄弟商會

店主 三村 晃造

大阪市西區南堀江上通
二丁目八番地
電話櫻川三二〇二番

綿真印衣羽
帳蚊印鷄金

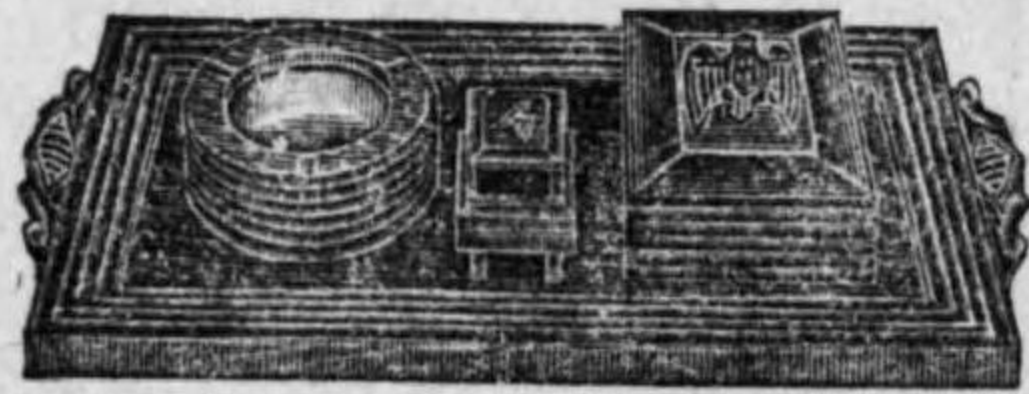


具寢洋和
綿絹印車羽

店商義中田

目丁二町郎太久南區東市阪大
番六五三〇・六九〇四場船話電
番六六二阪大替振
壹壹目丁壹通雲八區合葺市戸神 所張出戸神
番七〇〇七合葺話電

品藝工と器錫



(トツモ製木)

弊店も時局に順應しま
した品々を各種販賣致
して居ります
何卒御利用希上ます

錫器・鍍金製品・硝子
木製・陶器・美術置物
漆器・七寶製品
新興各種工藝品

大阪市東區南久寶寺町四

錫半本店

電話船場二一
四四二一
振替口座大阪一三〇番
二一八〇六二
〇一八〇

東京市神田區鍛冶町三ノ四
錫半東京出張店

電話神田八六八番

滿洲國大和區奉天橋立町六
滿洲錫平



蒲團、毛布、綿
羽根蒲團
卸

森田直次郎商店

營業所

大阪市南區南炭屋町三六
電話南(75)一〇九七番
大阪市南區東清水町三七ノ二
電話南(75)一〇九〇番
自宅

營業品目

結合含製各種時計
歐米各種時計
貴金屬・裝身具
ダイヤモンド・眞珠
内外各種美術工藝品
金銀器・硝子器・陶漆器
照明器具・皮革製品
眼鏡及双眼鏡
寫眞機・ラヂオ
蓄音機・レコード
測量・製圖用諸機械

服部時計店

大阪市東區博勞町四丁目角
電話(83)994・955・1463・1464

本店 東京・銀座



組紐問屋
株式會社
丸全商店

大阪店 大阪市東區備後町一
電話本町壹參貳九番
京都市綾小路室町東入
電話下六五貳貳番

大阪市東區平野町四丁目五十八番地

伊藤メリヤス 商事會社
有限會社

大阪出張所

電話北濱(23)八〇七番
本社及工場 三重縣四日市々々外室山
電話四日市團七二四番

プライダル印製品發賣元
專賣特許防縮加工品
メリス毛メリヤス
毛糸製品各種綿製品
卸商

大阪市東區南久寶寺町五丁目四三番地
堀尾甚能商店營業所

電話船場(83) 四二〇七〇番 一五三四番
四五六番 五一九五番
夜間專用 三三二九番
東京店 東京市日本橋區室町三丁目四ノ九
名古屋店 名古屋市中區南武平二丁目三

本店 神戸市神戶區元町三丁目

電話三宮 一一一六番

柴田音吉商店

大阪出張所 大阪市東區高麗橋二ノ五六

電話北濱 二二二六番 二二六一番



ちきりや茶店
秋山覺治郎

京都市三條通新町東入
電話本局五二八・三八四八番
振替 京都一八一〇番
製茶所 山城宇治木幡

半衿服裝品卸

(日野重)

神谷重右衛門商店

京都市東洞院四條上
電話本局②五七九番
振替京都二五二四番



株式會社小川純商店

京都市中京區兩替町通御池上ル
電話本局②二五三四番
東京市日本橋區室町一丁目十四
電話日本橋(24)二五六七番

筑前博多織製造卸問屋

西村善次郎商店

京都市室町通三條上
電話本局 五四六番



株式會社 佐々木營業部

本店 大阪市東區安土町二丁目
支店 東京市日本橋區大傳馬町三丁目
名古屋市中區南鍛冶屋町四丁目

吳服商

外定商店 大阪支店

大阪市東區本町二ノ二
電話本町(4)二八四・二八五・一七四二番

毛綿莫大小高級雜貨製造

若林亥之助商店

大阪市西區靱北通貳丁目卅四番地
電話土佐堀(4)三〇三・八一五
東京市日本橋區矢ノ倉町拾四番地
電話浪花(4)四六〇・四四番

メリヤス雜貨商

島村英三商店

大阪市西區靱上通二ノ一四
電話土佐堀(4)五二二・三〇一

ノット、フック、便箋、洋帳、手帳、寫真、紙加工品

卸商

竹内ノット

大阪市南區空堀町三番地
電話南九二九四番

營業品目

磁器、銅器、加アルミ、アルミ、一般金物雜貨

合名會社 田島商店

大阪市西區南堀通二丁目一
電話(4)川櫻(4)六一六・六一六
東京市東區下谷區豐住町二〇
奉天店 奉天市加茂町一七

圖書出版 小學參考書

卸取次 童話(春秋社版、金星社版)

繪本(成堂、春江堂、金井富士屋、中村版外各社)

其他一般圖書(中央公論社版外、家庭書、通俗圖書外一切)

岡田文祥堂

兒童圖書出版(繪本、漫畫、ヌリエ)

畫社

東京市神田區神保町一丁目三ノ一
電話新大塚(4)二六八
大阪市西區阿波堀通一丁目三ノ一
電話新大塚(4)二六八
電話東新(4)一六八
電話東新(4)一六八

愛國防空電燈 製造發賣元

電氣機械器具材料・ラヂオ一式

三共電氣工業所

大阪市西區江戶堀北通五ノ二五
電話土佐堀(4)一五九八
振替口座大阪九七二八五番

スキナ印ガーゼ製品 本舗
かすみタオル
エピソードレス及加工品商
エプロン・スタイ

渡邊一良商店

大阪市南區順慶町三丁目二番
電話船場(83)一八二二番
振替大阪(83)四〇三一七番
取引銀行 三和銀行船場支店

十合專屬

高級履物

奥貫金藏

大阪出張所
大阪市南區鰻谷仲之町十八
電話南(75)〇八五七番
東京市淺草區猿若町二ノ一
電話淺草(84)五二九五番

エプロン
割烹着
ベビー用品
小供服装雜貨
絹綿布加工

小原武二商店

大阪市東區瓦町一丁目二八番地
電話北濱(23)一三八一
振替大阪一一〇八七番

日用百貨
高級神物
宮殿神器
卸問屋

神納平兵衛商店

大阪市東區内本町松屋町
電話東(94)一四一
振替口座大阪七三一五二番



座銀・京東

株式會社資生堂

電氣機具材料
映寫用カーボン
元扱

丸菱電氣株式會社

大阪市浪速區新川三丁目六二七
電話戎四九二七番
振替口座大阪七一四四四番

京吳服

廣巾織物

兒服地

既製品



株式會社

鳴瀨商店

學生服製造卸

山高株式會社
大阪出張所

大阪市西區北堀江通二ノ二
電話 新町一〇九四番
振替 大阪六七二八〇番

鞆皮革製造卸商

シマダ商店

大阪市南區西清水町一二
電話南(75)二三二四番

内外寶飾社

佐倉勝郎

大阪市南區
末吉橋通四ノ九

一閑張柳行李卸商

龜島多十郎
商店

大阪市南區心齋橋一ノ一
電話南(75)四九二一番

あづき石鹼百貨店總販賣元・百貨店特
製石鹼化粧品・各種化粧品原料販賣

田中實商店
大阪市浪速區新川三丁目六五番
電話戎(76)六〇一六番

伊達じめ本舖

廣田商店
京都市新町通六角下ル
電話本局(2)一七六八番

東京店 京都市日本橋區富澤町十四
電話浪花(3)三九五四番

松

守口源次郎屋

有職
御雛人形・風俗人形
五月人形・飾具足

本店 京都市御幸町五條上
電話本局(2)五九〇四番
支店 京都市河原町四條上
電話本局(2)二五九〇番
振替 貯金口座 京都一七七八番

新書畫

生春堂

森本辰之助

京都市左京區
下鴨上川原町八七
電話上(3)四二七三

御雛人形 卸商
五月人形

齋藤信太郎

京都市若宮通松原下ル
電話下(6)二五二八番
小賣部 京都市四條通柳
馬場東入

吳服半襟服裝品卸商

園田商店

京都市中京區御池通
高倉東入
電話本局(2)四四四〇番

山田雜貨商店

京都市三條高倉
電話本局(2)六二五七番
電信略號(ヤス)

染吳服卸商



西島市治郎商店

京都市押小路通新町西
電話上(3)四八六七番

吉田豊次郎

京都市室町三條北
電話本局六二〇番

柳原勇

柳原寫眞館主
神戸市三宮町
二丁目二九三
(大丸東取引所前)
電話三宮一六六一番

染既人絹織物
吳製服品物
問屋



吉田繁次郎商店

京都市室町御池上ル
電話本局二二八五番



履物商

十合專屬

磯邊商店

磯邊好夫

大阪市南區高津五番丁四一
番地 電話戎(76)四七二五
番 振替口座大阪九三〇七三番

一般洋家具設計製作
曲木應用洋家具
室內裝飾

日本木材工業株式會社

大阪市西淀川區大仁本町三ノ一
電話福島(45)三〇一七、五四一六

婦人子供服洋裝雜貨
綿布毛織加工品商

植田商店

本店 大阪市西區阿波座中通二丁目一八番
電話新町(53)三七〇四番
振替大阪三〇三九六番
雜貨部 大阪市西區靱中通二丁目十六番
電話土佐堀四七八五番

ネクタ
ベクトル
ズボルト
外舶來雜貨
製造卸商

株式會社 佐藤弘大阪支店

本店 大阪市南區末吉橋通三ノ六番
電話船橋一八四二番
東京市日本橋區兩國四十八番地二番
電話浪花(45)六二・三九五番
振替口座東京四七七五番

株式會社 明治屋大阪支店

大阪市東區南本町二丁目
電話船場(83)三三〇三
四五六九一
四五七〇
四七〇

紀州漆器問屋

合名會社 名手漆器店

本店 和歌山縣海南市黑江
電話三三五九番
大阪支店 南區須慶町壹丁目三五番
電話船場四九三三番

化粧品

小栗商店

大阪市東區內淡路町二丁目七番地
電話東(94)六四一二番

兒供洋服
糸兒供服
綿布製品
卸商

合名會社 服部慶商店

大阪市東區北久寶寺町五丁目
電話船場(83)三三一五番
四七七三番
東京出張所 東京市日本橋區馬喰町三丁目三
(淺草橋) 電話浪花(45)五一五二番

風呂敷製造問屋



株式會社

山繁商店

大阪市東區本町四丁目

電話本町 長一七四〇番
日本橋區大馬路三三三番
電話浪花三三三番
東京店 博多店
福岡市博多本町三十三番
電話東一七八番

大阪市北區都島中通三丁目



株式會社

東洋ネクタイ製織所

東京支店
京都工場

帛 風
紗 敷 殿
問屋

ふくさバツク發賣元

株式會社 宮井商店大阪店

本店 大阪市東區南本町三丁目
電話船場(83)三〇四二・一六一〇
支店 京都・都市・鳥丸・四條
東京・名古屋・博多・金澤・京城

乾海苔問屋

網島商店大阪支店

大阪市北區樽屋町九番地
電話堀川三〇五〇番

高級

紳士洋傘 晴雨兼用傘 卸商

百貨店専門

丸山照治商店

大阪市西區北堀江上通
一丁目十五番地ノ一
電話新町(53)四〇一六番

婦人子供洋裝品 高級洋傘

製造卸

多羅尾商店

出張所

大阪市南區問屋町四番地
電話南(75)三九九一・五六九二番
東京市日本橋區通二丁目一ノ七
電話日本橋(24)二五四八番

幾村食品産業株式會社

大阪市西區新町通二ノ五八
電話新町五二・二〇一九番

各種織物洋品雜貨



松居商事株式會社

大阪支店

大阪市東區南本町一ノ二五
電話船場(83)三四三〇番

營業科目

羅紗地既製品。オーバ。トンビ。背廣。詰衿上下。ズボン。男女學生服。男女子供オーバ。外套。厚司。商人コート。バラソル。晴雨兼用傘。シヨール。首巻。

株式會社 北川慶商店

大阪市東區唐物町五丁目
電話船場 一五五〇九八番
振替大阪 九七六九番

ツバメ齒刷子
化粧容器
本舖

株式會社 西岡貞商店
化粧品部

大阪市東區南久寶寺町二丁目
私書函 大阪東郵便局第廿八號
電話船場 一七五・一七六・一七七番
振替大阪 一一三四番

肩掛洋傘製造卸商



株式會社 田中久商店

京都市室町通高辻角
長二八四番
電話(下) 〇八四七番
振替大阪 八四八〇五番

羅紗商

株式會社 鷹岡商店

大阪市東區淡路町四丁目
電話北濱(23) 九七三番
支店 東京市神田須田町 九七四番



製品種目

ナショナル受信機及部品品
ナショナルランプ通信用灯火用乾電池
ナショナル探見ケース自轉車錠各種
マツライト製各種配線器具
松下のコンサツトチューブ及部品品
ナショナル電氣アイロン、電氣コンロ
ナショナル暖房器、ナショナル電動機
ナショナル電球、電氣扇

松下電器商事株式會社

大阪市此花區大開町
二丁目二五番地
電話土佐堀(44) 六〇四五番
三一〇九番

化粧品石鹼問屋

朝日堂株式會社

大阪市東區南久寶寺町四丁目
電話船場(83) 〇〇七七六
八七六六番
八九七九番

織物雜貨商

克株式會社野呂克商店

大阪市東區備後町四丁目

電氣スタンド専門

大和組シゲル共販株式會社

代表者 中村茂治

大阪市南區炭屋町
電話南二九四二番

ダイヤモンド、貴金屬、裝身具
眞珠、銀器、金屬雜貨 卸

株式會社 三ツ輪屋商店大阪店

大阪市南區西清水町八番地
電話南(76)六八一・二・六八一・三番
本店 東京市本郷區千駄木町(團子坂) 電話駒込三八八・三八九番
工場 東京市豊島區駒込一丁目六二 電話大塚(86)五七三〇番
眞珠養殖場 三重縣度會郡中島村阿會 電話中島一五番

ストロング靴下
レンケツ靴下
ストロング手袋
製造發賣元

ストロング靴下株式會社

大阪市南區南綿屋町四十番地(道仁小學校東門前)
電話南(76)六六八・六六八・六六九番
振替口座大阪六〇一・二九番
取引銀行 三井銀行 第百銀行 三和銀行

織物卸問屋

下村株式會社大阪店

大阪市東區南本町二丁目
電話船場(83)八三三番

Yヨットシルバ―製品關西總代理店
月印火箸關西總發賣元
K K K高級硝子器發賣元

名作美術品
宣德銅器
アンチモニ
プロンズ工藝品
高級七寶漆器
陶磁器

卸商



橘高興業株式會社

大阪市南區横堀町七丁目四十番地
(但シ新町橋東詰南半丁西側)
電話船場(83)三六五九・一六五七番

裏絹白生地卸商

合名
會社

上島梅治郎商店

京都市室町通三條南
電話本局② 三〇八七三五番

星鷹印ネクタイ

製造發賣元

株式
會社

高瀬商店大阪支店


本店

大阪市東區南久寶寺町三丁目
電話船場一八七〇番
振替口座大阪八〇八五六番
東京市荒川區日暮里町三丁目七七二
電話根岸三一四八・三一四九・四〇三四番

化粧品製造

會陽化學研究所

大阪市西淀川區海老江上四ノ四
電話福島(45)五三五二番



アングルメリヤス代理店
ハクホーメリヤス本舗

株式
會社 羽白商店

大阪市東區北久太郎町三丁目
電話船場(8)一三三四・一五一四番

公 益 第 一 主 義 的 産 生 へ



森永の 新体制



代 用 食 へ の 邁 進

軍用型乾パンの製造に全力を傾注してゐることは既に御承知の通りでありますこの他新代用食の発表も着々準備を進めて居ります

幼 児 食 糧 の 確 保

特に離乳期前後の赤ちゃんには缺くべからざる食物であります森永マンナは より以上原料を精選し配給を円滑に致します

キヤラメル の 品質低下防止

子供の必需栄養品としての森永キヤラメルの存在は一層重くなつて参りました 品質を絶対に低下せすしかも増産に邁進します

高 度 榮 養 品 の 研 究

國民の健康を完全に保つ爲には榮養の偏しない 豊かな食物でなければなりません その爲に森永の製品は一個一個高度な榮養品として誠をこめて製造致して居ります

森永製菓株式会社

紳士用品
婦人装身具
喫煙用具

内外向産品
專問製作卸



井 垣 立 大 阪 店

大 阪 市 南 區 順 慶 町 中 橋 角
電 話 船 場 三 五 四 三 一 八 五
本 店 長 崎 市 江 戸 町 六 八
東 京 店 東 京 市 麻 布 區 土 町 四 五

昭和十七年九月九日 初刷印刷
昭和十七年九月二十日 初版發行

百貨店叢書 **そごう** (四〇〇部)

【非賣品】

編輯者 村上 静人

發行者 東京市京橋區銀座六丁目四番地 德永光太郎

印刷所 東京市小石川東古川町十番地 中外印刷株式會社 東東七〇九

{ 出 文 協 承 認 }
{ あ 7 0 0 4 9 號 }

不 許
複 製

發行所

東京市京橋區銀座六丁目四番地
電話銀座(五七)一九九五番
振替口座東京六四五一番

株式會社 百貨店新聞社出版部

(日本出版文化協會會員番號一二七五〇八號)

大阪支社

大阪市西區京町堀京ビル
電話土佐堀六四九〇番

京都支社

京都市下京區河原町通四條下ル
(富士生命ビル) 電話下二七九四番

配給元 日本出版配給株式會社 (東京市神田區淡路町二ノ九)

937
190



937
190

終

